



特集

「通信制」が 秘める可能性

なぜ中学生は
通信制高校を選ぶのか



広告掲載に関するお問い合わせ・お申し込みは 【発行元】株式会社モノリスジャパン 〒163-0918 東京都新宿区西新宿2-3-1 新宿モノリス18F TEL 03-6279-4761 FAX 03-6279-4762 Mail : info@monolith-j.com

通信制高校・サポート校の **広報** なら、リクメディア

通信制高校の合同説明会
「まるごと通信制フェスタ」



通信制高校の資料請求サイト
「まるごと通信制ナビ」



無料
プラン
あり

進学に強い通信制高校の進学ナビ
「すごい通信制高校」



無料
プラン
あり

これまで **200校以上** の通信制高校・サポート校の支援実績あり

合同説明会

一括資料請求サイト

ブランディング

まで、リクメディアがまるごと支援



株式会社リクメディア
RECMEDIA

リクメディア



<https://recmedia.jp/>

企画資料・お見積りのお問い合わせはこちら

無料プランについても、気軽にお問い合わせください。
通信制サポート校を開校したい"学習塾"のご相談も受け付けております。



私教育新聞

September
2026
[9月号]

ISSUE. 135

特集① ————— 3

「通信制」が秘める可能性

～なぜ中学生は通信制高校を選ぶのか～

第1章／ジョニーに聞く！今、通信制高校が選ばれる理由

第2章／注目の通信制高校サポート校
「青楓館高等学院」岡内大晟代表インタビュー

第3章／通信制高校の躍進は「通信制大学」も変えるのか？

連載コラム

教えて！エデュテイメントのつくりかた ————— 12

正頭式「学級経営」2学期のキーワード
正頭 英和

AI×教育の未来予想図 ————— 13

二学期の活力を引き出す
—生成AIで支える行事・進路指導・探究学習
尾上 幸裕

学びの場としての新時代の大学 ————— 18

問いは才能ではない
—閉じた「なぜ」と開いた「なぜ」—
安永 卓生

教育を変える。未来が変わる。 ————— 19

量は足りている、配分が足りない
—日本の教育を変える最後の資源—
池森 英雄

特集② ————— 14

多様化する国際教育のカタチ

開智中学・高等学校 中高一貫部 校長 菅沼 健児

花園中学高等学校 校長 中村 広記

タムタムism 探究の次の一手 ————— 20

日本の部活動こそ探究！②
田村 直宏

ジョニー藤村の教育×経営論 ————— 21

教育現場にも、広報の専門家を！
藤村 賢志

中土井鉄信の辛口トーク！ ————— 21

情報を客観的に伝える視点！
中土井 鉄信

私学教育の現在地 ————— 22

男子難関志向一層強まる
～女子も難関にシフト
森上 展安

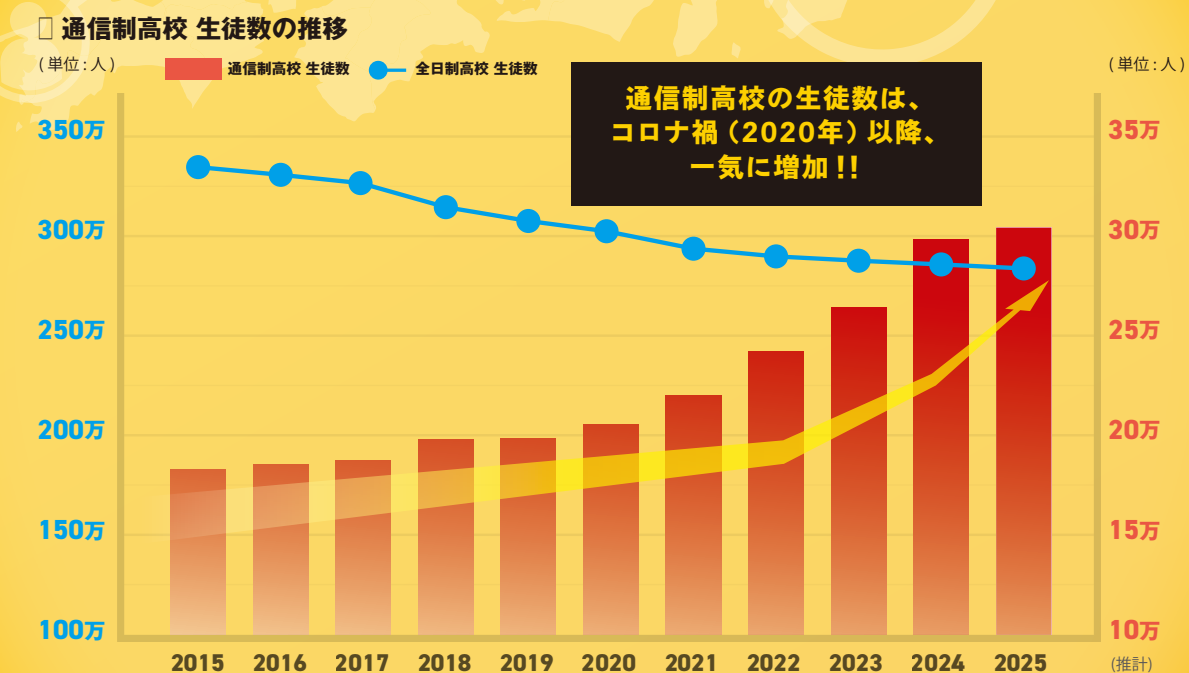
CONTENTS

特集

通信制 が秘める可能性

なぜ中学生は通信制高校を選ぶのか？

深刻な少子化を背景に全日制高校に通う生徒が年々減少する一方で、通信制高校に在籍する生徒の数は増加傾向にあるという。文部科学省の『2025年度学校基本調査』によると、通信制高校の生徒数は約30万5000人。高校生のおよそ10人に1人は通信制高校に在籍している計算になる（ちなみに10年前の割合は約5.4%。10年間でほぼ倍増）。この流れは、単に「通信制高校が増えている」という話ではなく、受験生が「自分に合った高校を選ぶ」時代の幕開けなのかもしれない。通信制高校の「躍進」は、高校教育をどう変えていくのだろうか。



特集 CONTENTS

第1章



ジョニーに聞く！
今、通信制高校が
選ばれる理由

P4~5

第2章



注目の通信制高校サポート校
「青楓館高等学院」
岡内大晟代表
インタビュー

P6~7

第3章



通信制高校の躍進は
「通信制大学」も
変えるのか？

P8~9

日本で唯一、私学と私塾をつなぐ完全フリーペーパー

私教育新聞
バックナンバー
配信中！

教育現場の最前線へ！

私教育新聞では、さまざまな教育情報や実践的な教育事例、学校運営や塾運営のヒントとなる情報を発信しています。過去、見逃してしまった貴重な情報の掘り起こしや、今一度教職員にシェアしたい記事をピックアップしたり、ぜひ情報収集にお役立てください。

＼ 一覧はこちらから /



バックナンバーは
すべて
無料で閲覧可能です！



特集

「通信制」が秘める可能性～なぜ中学生は通信制高校を選ぶのか～

【第1章】



株式会社リクメディア
代表取締役
藤村 賢志
(通称ジョニー)

ジョニーに聞く！



今、通信制高校が 選ばれる理由

前ページの生徒数の推移だけを見ても、ここ数年の通信制高校の「躍進」は目を見張るものがある。しかも、年々少子化が進む中で数字が伸びているだけに、その勢いは疑いようもない。そこで、私教育新聞のコラムでもお馴染みの株式会社リクメディア藤村賢志氏(通称ジョニー)に、今、通信制高校が中学生の進路先として選ばれている理由について詳しく話を聞いた。

通信制高校が急激に成長した背景とは？

今でも「通信制高校」と聞くと、勉強が苦手な生徒や不登校気味の生徒が通うイメージが一般的かもしれない。しかし、少し意識して業界の勢力図に目を向けてみると、その「異変」に気付く人は少なくないだろう。今、確実に通信制高校は、その勢いを増し、多くの中学生の進路先として認識され始めている。「通信制高校が伸びている要因は大きく3つ考えられます」と、通信制高校の実情に詳しい藤村氏は分析する。

「まずはコロナ禍によってオンラインが一気に普及したこと。教育面でもビジネス面でも『オンライン』が日常で使われる言葉になりました」

確かにオンライン授業やリモートワークなどの影響で、若者だけではなく全世代においてオンラインに対する抵抗感がなくなり、ポジティブなものとして認知されることになった。学校や会社など「現場」に行くことなく、勉強も仕事も対応できる状況が、通信制高校の仕組みとマッチしたと考えられる。実際、通信制高校の学校数も生徒数もコロナ禍の2020年辺りを境に急増しているのだ。

「次にN高等学校の影響は大きいですね。CM戦略もそうですが、メディアで大きく取り上げられることで、“通信制高校は不登校の生徒だけが通う学校ではない”ことが広く知れ渡りました」

さまざまな夢を抱いたN高の生徒たちが最新設備を駆使しながら学ぶ姿に「新しい学び方」を感じた人も多いだろう。N高の誕生は、通信制高校のイメージを一新したと言っても過言ではない。

「それでもひとつ。実はこれが最も大きな要因だと思うのですが、多様性の世の中に対応した“学びの形”が通信制だったということです。我々の時代の中高生たちは『昨日のテレビ見た?』という話題で盛り上がったわけですが、今はSNSの時代。個々が同じものを見て共感して盛り上がることはありません。かと言って、みんながバラバラなわけではなく、自分たちの価値観は違っても、お互いを尊重しながら付き合えるのが現代の子どもたち。全員がいい大学に入ることや、いい会社に入ることを目指すのではなく、自分はこれが見たい、自分はこれを目指したいと一人ひとりが自己を主張する。流行の言葉を使えば、そんな『個別最適な学び』に対応しやすいのが通信制だったのです」

クラス全員揃って一律に勉強するのが当たり前だった時代から、目指すもの、必要なことが異なる個々に適した学びが求められる時代への転換期。「通信制の選択もありだね」と世の中に認識された背景には、時代の流れの明確な変化があるようだ。

通信制高校の学びを支えるサポート校の進化

通信制高校の躍進に欠かせないのが「サポート校」の存在だ。サポート校はその名の通り、通信制高校と連携して生徒の学びをサポートすることが役割。ただその「役割」が、近年大きく変わってきたと藤村氏が指摘する。

「ひと昔前のサポート校は、レポートやスクーリングなど、通信制高校を卒業するために最低限必要なことのサポートが主な役割でした。地元密着型で不登校の生徒をしっかり卒業させることに特化していたのです。その役割が徐々に広がり、ただ卒業させるだけではなく、大学受験や就職支援も担うようになるなど、サポート校は、勉強が苦手だったり不登校だった生徒の高校卒業を目的とする時代から、充実した高校生活を過ごすためのサポートも求められる時代になりました」

大学入試においては、コロナ禍と前後する時期に総合型選抜が導入された影響も大きい。総合型選抜では、当然、生徒個々への対応が中心となるため、通信制高校やサポート校が力を発揮しやすく、一気に存在感を増してきた背景もある。

自身で大学受験や就職支援などのサポートを行っている大手通信制高校であれば、サポート校に頼る必要はないが、サポート校と連携することで、学校生活の充実を図り、学校としての魅力を高めている通信制高校も一定数見られる。全日制との「差」を縮めるためにも、サポート校との連携は通信制高校には欠かせない大きな役割を果たしているのだ。

通信制高校を視野に入れる受験生と保護者の本音は？

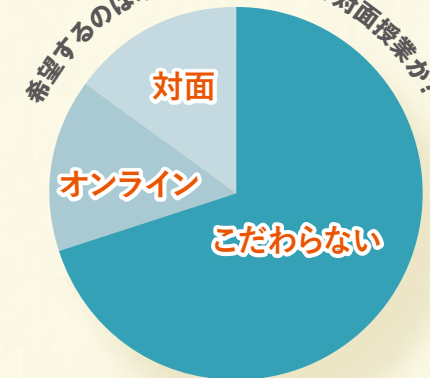
株式会社リクメディアでは、定期的に「まるごと通信制フェスタ」と題し、オンラインによる通信制高校とサポート校の合同進学相談会を全国規模で開催している。その際の受験生や保護者との交流を通じて、近年の通信制高校への関心の高さを実感していると藤村氏は語る。

「全日制高校と比べると通信制高校に関する情報は少なく、学校同士の比較も難しいのが実状です。少しでも通信制高校に興味がある方々に情報を伝えたいとの思いで、オンラインによる通信制高校の合同相談会を企画したのが、『まるごと通信制フェスタ』の始まりでした。当時は不登校の生徒を持つ保護者の方が多い印象でしたが、本当に近年は通信制と全日制の両方を考えているという方が増えました。中学生にとって通信制高校は、しっかりと進学先の選択肢に入っている印象です」

また、ひとつの傾向として、授業はオンラインでも対面でもどちらでもこだわらないという人が多いという。通信制だからオンライン、不登校だから対面は苦手などの一般的なイメージでは一括りにできない現実がそこにはある。

「フェスタへの参加者にアンケートを取っているのですが、例えば『希望するのはオンライン授業か?対面授業か?』との問いには、こだわらないという人が約70%もいます。つまり通信制とはいえ、登校する形にも抵抗感はないということです。通信制と全日制、あるいはオンライン授業と対面授業を問わず、学校の中身で進学先を決めたいという方々が多いと思われます。そういう意味でも、通信制高校の情報を広く提供し、学校間の比較を可能にしている我々の取り組みも少しは役立っているのではと自負しています」

まるごと通信制フェスタ参加者アンケートより



通信制高校+サポート校は「専門性」を求める時代に

毎年のように新しい「サポート校」が誕生しているが、中には大手の学習塾や教育関連企業などが母体となるケースも見られる。もちろん大手であれば、受け入れ態勢にもゆとりがあり、幅広い生徒を集めてサポートすることも可能だが、中小のサポート校ではそれも難しい。そこで顕著なのが、何かに特化した強みを持つサポート校の存在。例えば、海外留学に強い、資格取得に強い、IT関連に強いなど、生徒の興味に合わせた強みを持たせる戦略だ。スポーツ・eスポーツに特化した通信制はすでに多く存在し、野球部が甲子園に出場する学校も見られるなど一定の成果もあげている。自分がやりたいことに全力で取り組める環境は、一見、専門学校のようにも思えるが、高校進学時点で目標が明確な子どもたちにとってはモチベーション高く取り組めることも“理想的な学び方”なのかもしれない。ただし、「市場規模を考えると、これからは淘汰されるフェーズに入るのかもしれない」と、藤村氏は予想する。

「いくら通信制高校やサポート校に勢いがあると言っても、このまま増え続けるわ

けにはいきません。やがては淘汰されるでしょう。そのなかで大手に負けずに生き残るためには、何か「武器」を持つことが必要。それが『〇〇に強い』という独自性の強い専門色だと思います。胸を張って『〇〇に強い通信制』を謳える学校が競争を生き抜いていくはずですよ」

これだけ通信制高校に注目が集まっている状況を全日制の学校はどのように捉えているのだろうか。通信制高校がサポート校と連携し、新しい時代の子どもたちが求めるサービスの提供に積極的にチャレンジし、実際に結果を出し始めているからには、それを黙って見ているわけにはいかないだろう。受験生や保護者が全日制と通信制を比較して選ぶ時代が既にやって来ていることを考慮すれば、「〇〇に強い学校」を全日制高校も明確に打ち出していく必要があるのかもしれない。「個別最適な学び」の時代に、求められる学び方、教え方の最適解は、まだまだ考え続ける必要がありそうだ。



特集

「通信制」が秘める可能性～なぜ中学生は通信制高校を選ぶのか～

【第2章】

注目の通信制高校サポート校「青楓館高等学院」 岡内大晟代表インタビュー

青楓館高等学院
代表
おかうち たいせい
岡内 大晟

これからの「教育の王道」を青楓館がつくれます。

青楓館高等学院は、「子どもの未来を守る」を教育理念に掲げ、生徒一人ひとりの個性を尊重し「自分らしく」生きる力を養うための教育を展開する通信制高校サポート校。2023年の開校以来、社会にひらかれたその独自の教育プログラムが注目を集め、生徒数は毎年順調に増加。今年は文部科学省のプロジェクトに採択されたり、海外大学に合格者を輩出したり、輝かしい教育成果もあげている。今回、代表の岡内大晟氏にインタビューの機会を得て、青楓館設立の経緯、青楓館ならではの学び、今後のビジョンなどについてお聞きした。

一人ひとりの個性を活かす教育。
理想の学校はつくるしかない

—— 青楓館高等学院を創設するきっかけは何だったのですか。

岡内 自分の中でいろいろとありまして……。順序立てて話をさせてください。もともと教育への関心は強く、大学時代は教師になるつもりで教育実習も経験しました。実習先は偏差値40前後の公立高校で、生徒は大学に進学せず、就職するか専門学校に進む子がほとんど。まさに社会に出る直前の状態でした。そんな生徒たちと触れ合って「社会のことを何も知らない自分が、何を教えられるんだ」と違和感を抱いたのです。

—— それで一旦は企業に就職されたのですね。

岡内 はい。東京のPR会社で、そこでは3年間で約400人の経営者にお会いし、インタビューを行いました。経営者の方は「右向け右」と言われても「いや、俺は左だと思う」「私は上だと思うね」と、自分のポリシーを持っている方ばかり。「ああ、こういう人たちが経済を回し、社会を作り、日本を盛り上げるんだ」と感じました。と同時に気づいたのです。日本の教育は真

逆だと。「右向け右」の一斉授業。左を向こうとすれば注意され、修正される。そのことにすぐ矛盾を感じました。「社会で活躍する人」と「学校教育が輩出する人」に乖離が起きているのです。

—— 確かに学校で人と違うことをすると注意されますね。

岡内 まだ日本の企業が軒並み世界のトップクラスだった時代、例えば平成の初期ならよかったのかもしれませんが。社会で求められるスキルが「素早く情報処理をする能力」でしたから。でも今の時代は違います。情報処理はAIが一瞬のうちに終わらせて「正解」を出してくれます。人に求められるのは正解のない問いと向き合う能力、いわば自分で「正解」を作る能力です。それなのに日本の教育は100年以上も変わらないまま。「右向け左」の生徒がいたとしても「いいね!その感覚!」「それが君の強みだよ!」と個性を尊重し、その可能性を伸ばしていく。そんな「個性教育」が必要だと思いました。

【世界時価総額ランキング】

平成元年			令和8年		
1	NTT	(日本)	1	エヌビディア	(米国)
2	日本興業銀行	(日本)	2	アップル	(米国)
3	住友銀行	(日本)	3	アルファベット	(米国)
4	富士銀行	(日本)	4	マイクロソフト	(米国)
5	第一勧業銀行	(日本)	5	アマゾン・ドット・コム	(米国)
6	IBM	(米国)	6	TSMC	(台湾)
7	三菱銀行	(日本)	7	ブロードコム	(米国)
8	エクソン	(米国)	8	サウジアラムコ	(サウジアラビア)
9	東京電力	(日本)	9	スペースX	(米国)
10	ロイヤル・ダッチ・シェル	(英国)	10	メタ・プラットフォームズ	(米国)

※2026年7月時点

—— その「個性教育」を自ら実現しようと考えたのですか。

岡内 まずは、当時のAO入試こそ個性を尊重できる教育だと考え、AO入試専門の学習塾に転職しました。そこで校長として約50名の生徒を受け持ち、初年度から合格率100%を達成。ある程度、自分の考えが間違っていないことを体感できましたが、まだ物足りませんでした。塾の時間は週2、3時間だけ。生徒一人ひとりと接している時間はあまりにも短い。その経験から、「時間比率の一番大きい学校での時間を変えなければ、生徒の人生を本当の意味で変えられない」との結論に至りました。ただし、そんな生徒一人ひとりと本当の意味で密にコミュニケーションを取っている学校は見当たりません。「じゃあ、自分で学校をつくるしかない」と考えたわけです。



教室を飛び出して学ぶPBL（課題解決型学習）

—— 「右向け左」を尊重する教育では、どんなことを学ぶのですか。

岡内 生徒一人ひとりの個性を尊重し、「自分らしく生きる力」を養う教育が、青楓館の基本方針です。そのために積極的に行っているのが、生徒と社会とを結びつけること。言い換えれば学校を“社会にひらく”活動です。PBL(課題解決型学習)と呼んでいますが、実際に企業や行政と連携して社会の課題と向き合い、解決する取り組みで、生徒が企画したプロジェクトに基づき、町長と一緒に公園を作ったり、企業の商品開発をしたり、中には衰退しつつあった夏祭りを復活させた生徒たちもいました。机の上では決して学べない「社会とのつながり」を実体験できる貴重な機会になっています。また、各業界の最前線で活躍する方々を講師として招いての特別授業も開講しています。とにかく社会を知るための経験が大切だと考えています。

—— その他にも青楓館ならではの取り組みはありますか。

岡内 個性教育や人間理解の一環として、生徒全員と教員が週1回の「1on1面談」を実施し、体調の確認から今週行うべきアクションプランのアドバイスまで行っています。常に生徒の考えていることや、やりたいことを理解することは、生徒一人ひとりの「自分らしく生きる」ことへのサポートに不可欠です。こうした積み重ねが、大学進学・海外大学進学・就職・起業など、多様なキャリアの実現にもつながります。それと青楓館は、部活動もユニークです。起業部、投資部、政治部、AI部、eスポーツ部、国際部、デザイン部、アート部と、いずれも「実践」し、「社会とつながる」活動を行っています。ちなみに私は起業部の顧問を務めています。起業と言えば、最近はアントレプレナーシップ教育が流行ですが、私は起業部だからといって起業を目指す必要はなく、大切なのは「起業家精神」を学ぶことだと考えています。「起業家精神」とは何か。それは変化が激しい現代社会において、周りから「愛される力」と、どんな困難でも「なんとかする力」です。社会でたくましく生き抜く力を身につけてもらいたいです。

科学的に裏付けされた教育メソッドで
海外からも注目される学校に—— 2023年の設立から丸3年が経ちました。
現状の手応えはいかがですか。

岡内 生徒たちの成長した姿に一番の手応えを感じています。もともと不登校だった生徒たちがみるみる成長し、志望大学に合格したり、海外に飛び立ったり、社会人の方と協働したりなど、自分のコンプレックスを武器に変えて大活躍している。ある意味で「奇跡」だと思います。

—— 不登校だった生徒たちが「変わる」瞬間があるのですか。

岡内 確実にあります。まずは承認することです。不登校の生徒たちは周囲から認められないことにコンプレックスを抱いています。だから褒めて、認めて、これでいいんだと安心させる。そこから第一歩が踏み出せるのです。青楓館では、さまざまな生徒が目を見詰める変化を遂げていきますが、その背景には心理学や脳科学、生物学など多岐にわたる科学的根拠をもとに構築した独自の教育メソッドがあります。「私はこうしたから、お前も同じようにやれ」「あの子が成功したら、お前もやれ」など、客観性に欠ける主観だらけの教育論では生徒は困ってしまいます。生徒たちの大きな飛躍は、このメソッドが間違っていないことの証です。

—— 特に海外を見据えた
取り組みに大きな
成果が見られますね。

岡内 そうですね。今年は文部科学省の「日本型教育の海外展開(EDU-Port ニッポン)」令和8年度応援プロジェクトに採択いただいたほか、3年連続となる「トビタテ!留学JAPAN」に過去最多4名の生徒が選出されました。それと春には初の海外大学合格者を輩出。しかもベルギーの最高学府「ルーヴェン・カトリック大学」への合格でした。これを機会に来年以降も海外大学を目指す生徒が増えてほしいですね。その他にもOECD直下のプロジェクト「Global AI Nexus of Schools」に日本代表校として参画したり、私自身も海外での講演依頼があったりなど、世界的にも青楓館が注目されるようになったことをうれしく思います。

教育の力を信じ続けて
日本を世界一の教育大国に

—— 青楓館のこれからのビジョンを聞かせてください。

岡内 「教育の力」で、生徒だけではなく、社会を、そして日本を変えていきたいです。昨今の日本は暗いニュースばかりですよ。物価高なのに、給料は変わらず、人口減。日本の若者は「将来への期待度ランキング」で最下位というデータもあります。しかし、どんな社会問題も「教材」に変えられるのが教育の持つ力です。さまざまな課題について生徒と一緒に授業の一環で解決策を考えたり、青楓館で教育を受けた生徒が社会で活躍することで課題を解決したり、そうしたことの積み重ねで社会や日本全体を変えることも可能だと思っています。

—— そのためにも高校生の段階から
「社会を知る」ことが必要なんですね。

岡内 学校は社会に出るための準備の場であるにもかかわらず、今の一般的なカリキュラムでは社会について学ぶ機会が十分とは言えません。だからこそ、青楓館のような学校が日本の「教育の王道」になっていくべきだと思うのです。うちの生徒だけが変わってもダメなんです。進学先となる大学も変わらないといけないし、その先にある社会も変わらないといけない。そんなことできるのかと笑われたり、あきれたりするかもしれませんが。それでも私は教育の力を信じています。「日本を世界一の教育大国にする」という大きすぎるビジョンを本気で実現するつもりです。

最後に私教育新聞の読者の方々に
メッセージをお願いします。

岡内 若造が生意気言ってますみません。しかし、今の教育に苦言を呈するものも、すべては子どもたちの未来のためです。子どもの将来を切り拓くのは教育の役目であり、教育でしか未来を変えることはできません。学校同士の競合がどうか言っている場合ではないですし、全日制や通信制のスタイルの違いも関係ありません。もし興味をお持ちの方がいらっしゃれば、青楓館が持つメソッドを喜んでご提供しますし、また我々ももっといろいろなことを学ばせていただきたいと思います。子どもたちの未来を守るための活動をご一緒にできればうれしいです。ぜひお気軽にご連絡ください。



特集

「通信制」が秘める可能性～なぜ中学生は通信制高校を選ぶのか～

第3章

通信制高校の
躍進は
「通信制大学」も
変えるのか？

一人ひとりの目的に合った「個別最適な学び」が通信制高校急伸の要因のひとつであるならば、老若男女を問わず、「いつでも」「だれでも」学べる環境を提供し続けてきた大学の通信教育の“在り方”にも変化が生まれるのではないだろうか。通信制大学の歴史を振り返りつつ、勢いを感じる新しい大学の誕生や通信制高校との親和性など、近年の大きな動きについても考察を加え、通信制大学の「これから」について考えてみたい。

通信制大学の4校同時の新規参入は18年ぶり

公益財団法人日本財団とIT企業のドワンゴによる学校法人日本財団ドワンゴ学園が、本格的なオンライン大学である「ZEN大学」を2025年4月に開学した。ドワンゴといえば、N高等学校・S高等学校・R高等学校を展開する学校法人角川ドワンゴ学園をイメージするが、両法人ともに理事長が同じであり、実際N高グループはZEN大学の系属校として位置づけられている。

そのZEN大学が今年6月に、「第一回実績発表会」を開催し、初年度の成果を発表した。報告内容によると開学1年目の入学者数は、4月生と10月生を合わせて4,236名。全47都道府県および海外からも学生が集まったという。注目すべきは、そのうち高校3年生(高等専門学校を含む)から直接入学した学生の割合が52.8%と半数を超えていることだ。浪人生や他大学の学生も14.6%を占めていることを考え合わせると、通信制大学は高校生の進学先としてしっかり選択肢に入っていると言えそうだ。

もちろんZEN大学はN高グループとのつながりがあるため、他の大学と同列に考えることはできない。実際、半数以上を占めた高校3年生からの入学者の70%近くはN高グループ出身者である。とはいえ、「オンラインへの柔軟性」「自分の時間を大切にするライフスタイル」「明確な目標へのチャレンジ」など、高校生の価値観の変化に対応することで躍進した通信制高校の生徒たちが、親和性のある通信制大学を選ぶことは自然な流れなのかもしれない。

なお、2025年にはZEN大学の他にも、学校法人大原学園による完全オンライン型の「東京経営大学」が開学。さらには岡山理科大学と名古屋産業大学が通信教育課程を新設した。複数同時に開学・新設されたのは2012年以来13年ぶりであり、4校同時となると実に2007年にまで遡る。そのことから通信制大学への期待度や注目度の高まりを感じることができる。

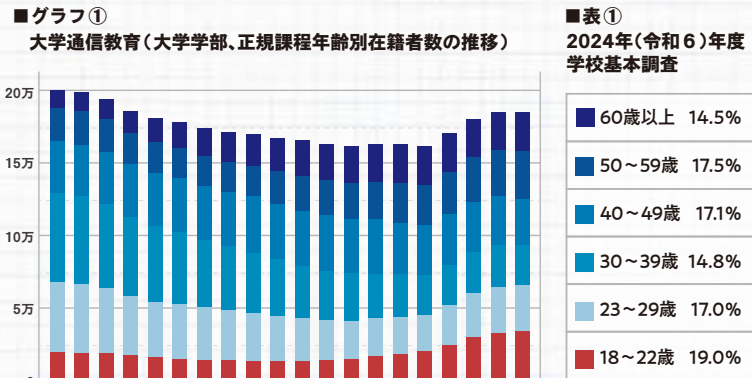


通信制大学に通う学生の若年層の割合が急上昇中

かつて通信制高校が、勉強が苦手だったり、不登校だったり、学校に通えない生徒のための学び舎であったのと同じように、通信制大学も働きながら学ぶ社会人や、定年退職後に趣味や教養を深めるために学ぶ高齢者、経済的な理由で通学課程が難しい学生など、特定の層のための学びの機会と捉えられがちだった。

文部科学省の『学校基本調査』によると、2025年現在、通学課程の大学数812校に対し、通信教育課程の大学数は前述4校を含めて47校で、その割合は約5%に過ぎない。学生数に目を向けると、通信制大学の正規課程(科目等履修生・聴講生は含まない)の学生数は、ちょうど20年前にあたる2005年の20万393人がピークで(学生数が20万人を超えたのは2005年のみ)、翌年からは20万人を下回り、2020年まで減少傾向が続いていく(グラフ①)。2020年を境に回復傾向を見せるのは、通信制高校のケースと同じくコロナ禍がオンライン学習を加速させたことによるものだろう。ここ数年で一気に学生数が伸びている傾向も通信制高校と同様だ。ひと昔前は郵便による教材送付とレポート添削が中心だった大学の通信教育が、インターネットや動画配信などを駆使した「オンライン」による学習環境が整備され、より多くの入学者の確保につながっていると思われる。

ちなみに正確な数字が公表されている2024年の通信制大学に通う学生数は184,735人だが、そのうち最も多い年齢層が18歳～22歳の若年層で約19.0%。年齢の幅が狭いにも関わらず高い数字となっている(表①)。この層の学生数は、ここ10年間で約2倍に増加していることがグラフから見て取れるが、この2024年までのグラフにはZEN大学をはじめとする4校の数字は含まれていない。そのため実は2025年時点では学生数の総数は19万人を突破し、若年層の割合もさらに増えて20%を超えている。こうして近年の学生数の推移だけを見ても、高校3年生から直接通信制大学を選ぶ層が一定数増えている現実が見えてくる。



地方の高校生たちの夢実現を通信制大学が切り拓く

高校生の一人ひとりが自分の夢や目標に対して素直に向き合い、簡単にあきらめたり、妥協したりしない環境を用意することは、教育の大きな役割だと言える。しかし、実際には地域格差とも呼べる難しい問題が山積みとなっている。例えば、地方の高校生が教師や看護師など資格が必要な職業を目指す場合、頑張って地元の国立大学を目指すのか、目指す学部が地元の私立大学になれば地元を離れるのか、資格によっては専門学校を選ぶのか、選択肢は限られる。家庭の都合で地元を離れることができずに、夢や目標を断念せざるを得ないケースもあるはずだ。

いみじくも私教育新聞133号の巻頭記事で「タムタム総理」が、次のように力説している箇所がある。

「私は大学進学率を上げたいと考えています。台湾の約8割に対し、日本は約5割。世界でも有数の学力を誇る日本の子どもたちのうち約半分しか大学に進学していない現実があります。その要因はいろいろ考えられますが、大きな理由のひとつが、地方の高校生が大学受験をせずに地元で就職してしまう現状があげられます。東京の大学で学びたくても、金銭面を含む家庭の事情であきらめている人がかなり存在します。(中略)地方に埋もれる優秀な人材が、日本を代表して世界と戦える人材として羽ばたくチャンスを用意したいのです」(ぜひバックナンバーをご覧ください。WEBサイトからでも閲覧可能)。

自分の夢に向かって大学で学びたいのに進学できない現実。その理由が地域性にあるのであれば、そんなときこそ全国に学びの門戸を開いている通信制大学が心強い存在となるはずだ。オンラインが充実した今、通信制の「いつでも」「だれでも」そして「どこでも」学べる環境が、大きな可能性を切り拓くことにつながる。高校にしる、大学にしる、「通信制」の存在が、地方に住む若者の未来を支える構図が自然と見えてくるようだ。

多様性の時代に選ばれる通信制ならではの魅力

青楓館高等学院の岡内代表へのインタビューからもわかるように、通信制高校で学ぶ生徒の印象は一昔前とは大きく異なっている。全日制に行けず、やむを得ず通信制に通うのではなく、「自分のペースで学びたい」「芸能・スポーツ・起業と両立したい」「海外留学をしたい」「好きなことにチャレンジしたい」など、自らの意思で主体的に通信制を選ぶケースがかなり増えているのだ。つまりは「通信=妥協」ではなく、「通信=自分らしい学び方」という価値観。そしてこの価値観は、そのまま通信制大学の学びにも当てはまるはずで、そこに通信制大学が今後飛躍するためのキーワードが隠されている。

通信制高校の急成長は単なる高校業界だけの話ではなく、「全員が教室の机に座って全く同じ授業を受けるもの」という日本の教育の前提が崩れ始めている前兆なのかもしれない。もしそうであれば、今後、通信制大学が再評価を受ける可能性も大いに考えられる。例えば、老若男女を問わず幅広い年代が学ぶ通信制大学に18歳世代が入学した場合、スクーリングなどで顔を合わせる「仲間の多様性」に大きな刺激を受けるはずだ。通学課程では、決して出会うことのない様々なバックボーンを持つ人々との出会い。そこで得られる経験値は、同級生だけの通学課程より何倍も高いものになるだろう。

近年、多様性の時代と言われ続けているが、その多様性を尊重した教育が実際のところどこまで実践されているのだろうか。「一人ひとりに寄り添う」と言葉では言えても実行することは難しい。日本の教育を見渡してみると、「多様性」への対応という意味では、「通信制」の学びのスタイルが一歩リードしているようにも思える。こうした時代の変化を受け、「選ばれる通信制大学」になるためには、学生一人ひとりに訴えかける独自の理念や特色をさらに打ち出すことが必要だろう。通信制大学の本当の勝負は、いま始まったばかりだ。



選ばれる通信制 創価大学通信教育部



創価大学通信教育部が選ばれる理由

その1: 「学びたい!」を見つける充実の4学部5学科			大学の通信教育として充実の4学部5学科を開設。興味・目的に合わせて好きなことが学べます。
経済経営学部	ビジネス学科	グローバルリーダーモデル／ビジネスデザインモデル／金融・財務プロフェッショナルモデル	
法学部	法律政治学科	リーガルモデル／市民生活・ビジネス法モデル／公共政策・行政モデル／環境・サステナビリティモデル／国際平和・外交モデル	
文学部	人間学科	日本語・日本文化モデル／社会・歴史・人類文化モデル／表現文化モデル／哲学・宗教・思想文化モデル	
教育学部	心理・教育学科	教育学モデル／社会教育モデル	
	児童教育学科	小学校モデル／幼稚園モデル／小1幼2免モデル／小2幼1免モデル／教養モデル	
科目等履修		学びたい内容に合わせて1科目から学修したい方へ	自由選択コース／特修生(正科課程入学資格取得)コース／教職コース／教職コース(幼保特例・新特例)

その2: 教員免許をはじめ社会に直結する資格取得



幼稚園・小学校の教員免許を取得できるほか、ファイナンシャル・プランナー、日商簿記、日本語教員など、社会で生かせる資格取得が可能。試験対策も行います。

その4: 仲間の存在が心強い全国に広がる「光友会」



都道府県ごとに「光友会」を組織し、定期的に勉強会や総会を開催。普段から学生同士が励まし合いながら学べる環境を用意し、一人ではなく、みんなで卒業を目指します。

その3: オンラインも対面も選べる学修システム



レポートやスクーリング、試験など、すべてオンラインでの学修が可能(一部科目を除く)。もちろんキャンパスでのスクーリングに参加し、教員や仲間と直接交流することもできます。

その5: 18歳世代も安心の手厚いキャリアサポート



高校から直接入学する18歳世代の増加に合わせて、就活やキャリアのサポート体制を強化。社会とつながる創価大学ならではのネットワークを駆使し、学生一人ひとりの未来を支えます。

創大通教ミニミニ情報

夏の対面スクーリングでは学生寮を開放

普段通学課程の学生が使っている学生寮を遠方からのスクーリング参加者のために開放。寮で寝食を共にすることで仲間との交流も深まります。



便利な通信教育部生専用サイト「学光ポータル」

「学光ポータル」は、各種手続きから学修まで一貫して行える専用のポータルサイト。パソコン、タブレット、スマートフォンで利用できます。



公式Instagramで最新情報を配信中!

最新のイベント情報や全世界から集う創大通教生の様子を紹介しています。ぜひご覧ください。



Instagramのフォローはこちら!



通信制高校から創大通教へ

通信制高校から創価大学通信教育部に入学した在学生(卒業生)からのメッセージです。

Vol.1



学んだ知識と技術を
人や社会の役に立てたい

佐藤湧也さん

経済学部経済学科・都立砂川高校(通信制)卒業
東京都出身

「経営学」の授業と一緒にディスカッションをした学友が、中小企業の経営者の方でした。実際の現場での経験やお話を直接聞くことは、通常の大学生ではなかなかできません。社会経験が豊富な学友たちとディスカッションできる機会は、創大通教ならではの貴重な体験です。また機関誌の『学光』では、国内外で勉強に励んでいる学友の活躍の様子を知ることができ、刺激を貰うことで自身の学びのモチベーションにつながっていると感じます。

Vol.2

國永美沙希さん

文学部人間学科・ルネサンス大阪高校卒業
長崎県出身



通信制だからこそ
できることがある

通信制だからこそできること、経験できることがたくさんあります。高校時代、海外へ行ったり、一人暮らしを始めたり、すべてが良い経験となり、今に生きています。通教では、学ぶ時間や場所、ペースも自分次第です。想像以上に自分が成長できる機会だと思います。私自身も卒業後、ワーホリで海外へ挑戦し、今も次の国へ向かう準備中です。皆さんも学びながら、且つ今しかできない経験をたくさんしてください。

Vol.3

全ての経験を力に。
最後に掴んだ教員という
使命の舞台

板垣美知華さん

教育学部児童教育学科・都立砂川高校(通信制)卒業
秋田県出身

Vol.4

勉強もやりたいことも
思う存分、
学べる最高の学修環境

高橋悠翔さん／松森一輝さん

経済学部経済学科・N高校卒業
岡山県出身



高橋:頭がスッキリしている朝の時間に勉強するなど、自分の時間を有効に使えるところが、通教のいいところだと思います。勉強に励みながら、自分のやりたいことにもチャレンジできるので楽しく学んでいます。皆さんにもオススメです。

松森:高校のときから動画やオンラインで勉強することに慣れていたので良かったと思います。高校のときより、自分の理解力が足りなかったり、考えを求められることが多かったり難しく感じることもありますが、スクーリングでは先生方が丁寧に教えてくれるので安心です。

Vol.5

小杉朱音さん

法学部法律学科・第一学院高校卒業
富山県出身



年齢も国も異なる学友との学びは
視野を広げる絶好の機会

創大通教では、年齢も職業も住んでいる国すら異なる方々と一緒に学ぶため、高校時代より、自分の考え方や視野が大きく広がったと思います。授業ではグループディスカッションなどで、高齢の方や、社会で働いている方、主婦の方など、さまざまな立場の方の意見が聞けるためとても勉強になり、1科目ごとに自分が成長している実感があります。同じ地域ごとに通教生同士が交流する機会もあり、ともに励まし合う仲間がいることは心強いです。



創価大学通信教育部

〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
Tel:042-691-3451
www.soka.ac.jp/tukyo/

詳しくは
こちらから





教えて！ エデュテイメントの つくりかた



立命館小学校教諭
東京大学客員研究員

正頭 英和

教育界のノーベル賞と言われる「GLOBAL TEACHER PRIZE 2019」において、日本人の小学校教師として初めてTOP10に選出され「世界の優秀な教員10人」となる。著書に「世界トップティーチャーが教える 子どもの未来が変わる英語の教科書」(講談社)。現在はエデュテイメントプロデューサーとして、「桃太郎電鉄教育版」プロジェクトをはじめ、他分野の企業とも積極的にコラボレーションを展開。子どもたちの未来のために「エデュテイメント」で教育界に新しい風を吹き込んでいる。2026年にはForbes JAPAN「アントレプレナーシップ教育 未来をひらく先生」100人」に選出された。

Hidekazu Shoto

正頭式「学級経営」2学期のキーワード

みなさん、こんにちは。立命館小学校でICT・情報系の授業を担当している正頭英和です。この度、Forbes JAPAN誌の「『アントレプレナーシップ教育 未来をひらく先生』100人」に選出していました。これも日頃から関わりのあるみなさんとの切磋琢磨があればこそだと思います。いつも本当にありがとうございます。さて、今回は春に続いて「学級経営」をテーマに取り上げました。2学期って何だかトラブルが多いと思いませんか。実はそれにはちゃんと理由があるのです。

2学期のトラブル発生は 当たり前のことだと考えましょう

1学期は平穏だったのに2学期になって早速トラブルが発生し、悩んで落ち込んでしまっている先生はいませんか。はっきり言います。2学期はトラブルが発生します。これは自然なこと、普通のことだと捉えてください。むしろ2学期に何もトラブルがない方が稀です。悪いことを隠れてコソコソしているか、先生の高圧的な態度に生徒たちが萎縮しているか。どちらにせよトラブル発生を前提とした心構えが2学期には必要です。

この2学期のトラブル発生ですが、しっかりとしたメカニズムがあります。1学期は「どんなクラスだろう」「どんな担任だろう」「どんな授業だろう」と、基本的に「様子見」の時期。そして何より子どもたちにとっては「クラスメイトとうまくやっていけるか」が最大の関心ごと。自分の立ち回りを気にして、相手を気遣って、みんなに好かれようと助け合う意識が全体に漂うのでトラブルが起こりづらいのです。それが2学期になると、みんなが仲良くなり、慣れも進んで居心地がよくなり、クラス全体がリラックスした雰囲気になります。すると緊張感が緩んで、ふとした瞬間に思わぬ言葉が口から出て、口論となり、トラブルに発展。悪気はないのに、ついつい発してしまった言葉が口論のきっかけになるケースは多いのです。

しかも、このトラブル、やっかいなことに何故か同時多発的に起こります。慣れない若手の先生は、これでパニックに陥ります。ここで一番やってはいけないこと。それは、一般論で片付けること。例えば、ホームルームの全員が

いる場所で、悪口を言った子どもに「言葉は暴力なんだよ」と諭したところで全く響きません。それが正論であってもです。では、どうするべきか。これはもう「案件」ごとに個別対応するしかありません。言った言わない、叩いた叩かれた、双方の話をじっくり聞いて、こじれた話を少しずつひも解いていくしかないのです。時間も手間もかかります。でも、あえて手間暇をかけるのです。以前、放課後の職員室に生徒がやってきて、担任である若手の先生に「家の鍵をなくした」と相談にきたことがありました。その先生は「それは大変だ。もう一度、通った道を探しておいで」と、再び子どもだけで探しに行かせたのです。それを見て、すぐに注意しました。「ここで一緒に探しに行くことが大切だよ。先生に寄り添ってもらえたことで子どもは安心するし、信頼感も得られる。もちろん鍵が見つかることが一番だけど、それと同じくらい、子どもに寄り添うことが重要。そしてその積み重ねが、スムーズな学級経営にもつながるんだよ」と、すぐに子どもの後を追わせました。2学期はそういう非効率的な動きが必要な時期とも言えます。時間をかけて、手間をかけて、そしてそれが3学期に花開くのです。

現状維持を打破するための 競争心と刺激が重要

2学期のトラブルに備えるには、1学期にどれだけクラス全体を把握し、自分なりの「学級経営」を実現できたかが問われます。まさに卒業・進級時に「最高のクラスだった」と言ってもらおうと、3学期に「いいクラス」を印象づけるための計画を練る先生がいます。終わり良ければすべて良しではありませんが、確かに最後に満足感を味わえるのは「きれい」なのかもしれません。でも、そのクラスはすぐに解散し、先生と子どもたちも離れ離れ、もし最終学年なら卒業です。きれいな思い出を胸に送り出すのは、一見理想的に見えるかもしれませんが、

しかも、このトラブル、やっかいなことに何故か同時多発的に起こります。慣れない若手の先生は、これでパニックに陥ります。ここで一番やってはいけないこと。それは、一般論で片付けること。例えば、ホームルームの全員が

おくべきこと。先程も言いましたが、帰属意識が高まり、比較的クラス全体が穏やかな1学期だからこそ、クラスのコントロールもしやすいはずなのです。そのうえで、トラブルが待っている2学期に備えるわけです。

ここで2学期に心がけたいキーワードを発表します。ズバリ「競争」です。2学期はクラス全体の競争心を刺激することが大切になってきます。時々、本当に穏やかな、俗にいう「いいクラス」を受け持つことがあります。1学期は何も問題なく過ごし、2学期も小さなトラブルはあるものの、みんなが優しく思いやりがあるので、お互いに助け合って大きなトラブルには発展しない。たとえテストの点が悪くてもみんなで「大丈夫、大丈夫、次頑張ろう」で終わってしまう、そんなクラスです。つまりは波風が立たないまま、現状維持で満足してしまう。担任は楽かもしれませんが、「ぬるま湯」に浸かっている子どもたちの実質的な成長は望めません。ここはやはり、先生側からの仕掛けが必要です。

2学期は学校行事も多い時期なので、例えば運動会や合唱コンクールなどのイベントを「活用」するのも手です。「合唱コンクールで優勝しよう!」と伝えれば、休み時間も練習しようと提案する子が現れる一方で、休み時間は自由に遊ばせようという子も現れ、お互いの主張がぶつかります。面白いのは、これはどちらの主張も正しい、正義vs正義の争いです。正義vs悪であれば、先生は迷うことなく正義に味方すればよいのですが、正義vs正義に中途半端に口を挟むと余計に話がこじれます。ここは中立に徹して、子どもたち同士に意見を戦わせる場を用意すべきです。こうした刺激ある環境を経験することで、子どもたちはお互いに高め合い、成長につながっていきます。

子どもたちを成長させるのは いいクラス? 悪いクラス?

ところで「いいクラス」って、どんなクラスなのでしょう。少し話はそれますが、過去に中学で担任をしていたとき、すぐくまじめで優等生タイプ的女子生徒がいました。どんな教育を受ければ、こんな完璧な中学生に育

つのだろうと思いい、小学校時代の思い出を尋ねたことがあります。そのときの答えが衝撃的でした。

「どうしても授業の進め方に納得できない先生がいて、クラス全員で先生を無視したり、授業をボイコットしたりしました。悪いことだと理解していて、卒業式の日にその先生に謝罪はしました。でも行動したこと自体に後悔はありません。クラス全体が団結できたこと、行動することで先生の授業が少し変わったこと、その経験が私にとって大切なことだったのです」と。その話を聞いたとき、生徒が成長する背景に、いいクラスも悪いクラスも関係ないのかもしれないと思いました。もし悪いクラスが生徒を成長させる要因であるのならそれもよし。確かにダメなクラスやダメな担任の方が生徒の自主性を鍛えることもあるのかもかもしれません。とはいえ、子どもたち全員が全員に当てはまる事例ではないので、進んで悪いクラスづくりを行うことはありませんが……。でも何がよくて、何が悪いのか、簡単には決めつけない方がいいと思いました。

1学期はクラス全体を把握して「学級経営」の方向性を固め、2学期は子ども一人ひとりに寄り添う時間をつくって人間関係を構築していく。そんな流れが理想です。よく「心が育つ」と言いますが、私は物事をいろいろな視点で見られる力だと解釈しています。コップに入った水を単なる「水」としてしか認識できない人か、人間に欠かせない生命の源だと考えたり、熱中症予防のための必需品と連想してみたり、多角的に思考を広げることができる人か。その差が大きいのです。そして、そんな子どもたちの視点を増やす手助けをするのが教師の大切な仕事だと思います。多彩な視点によって心が育てば、人との対話でも相手を思いやり、心ない言葉を発することもあります。人とコミュニケーションを取るうえで非常に重要な能力です。そんな「人間関係」を育てるのが2学期の重要ミッションです。

子どもたちだけではなく、実は我々教師側も気が緩みがちなのが2学期です。この時期を充実したものにできれば、それが必ず「実りの3学期」につながります。お互いに頑張しましょう。



教育の 未来予想図



株式会社FCE
取締役 兼 常務執行役員・エデュケーション事業本部長

尾上 幸裕

2002年同志社大学商学部を卒業後、東証一部上場の経営コンサルティング会社に入社し、フランチャイズ加盟開発に従事。2004年に同社教育事業に合流し、中日本マネージャー、東日本マネージャーを歴任。2016年に株式会社FCEエデュケーション取締役、2018年に同社代表取締役社長に就任。2019年には株式会社FCE Holdings(現 株式会社FCE)取締役に就任し、2024年からは株式会社日本コストピア代表取締役も務め、両社の経営に携わっている。

Takahiro Onoue

2学期の活力を引き出す —生成AIで支える行事・進路指導・探究学習

長い夏休みが明け、2学期(前期の後半)が本格的にスタートしました。九月中旬以降、中学校・高等学校の現場では、文化祭や体育祭といった大規模な学校行事、三年生の本格的な受験指導、さらには探究学習のまとめや中間テストの準備など、多岐にわたる業務が同時進行で押し寄せてきます。

前号(134号)では夏休み前の学期末業務に焦点を当てましたが、本号では「2学期の多様な教育活動」を生成AIでいかに効率的かつ効果的に進めるかをご提案します。生徒のモチベーションを高め、教員の皆様が本質的な指導に注力するための実践的なプロンプト例をご紹介します。

AIを「生徒の可能性を広げる触媒」 として活用する発想

2学期は行事や探究、進路選択を通じて生徒が大きく成長する時期です。教員には指導者としてだけでなく、伴走者・ファシリテーターとしての役割が強く求められます。生成AIは、アイデアの引き出しを増やし、指導の質を高めるための強力なパートナーとなります。以下、2学期特有の五つの場面に合わせたプロンプト例を紹介します。

①行事前のホームルーム講話の構成
2学期はじめや行事に向けて、生徒のモチベーションを高めるメッセージを語る際、AIに構成案を出してもらうことで、説得力のあるスピーチの土台が短時間で完成します。

【プロンプト例:中学校・高校 学級担任】
中学3年生の2学期はじめのホームルームで話す、5分程度の講話の構成案を作成してください。テーマは「行事(文化祭)と受験勉強の両立から学ぶこと」です。以下の要素を含めてください。
①導入:夏休みの努力への労い
②展開:行事で得られる協調性や段取り力が、実は受験や将来にも役立つという視点
③結び:クラス全体で協力しつつ、個人の目標も大切にすると前向きなメッセージ
箇条書きで、具体的なエピソードのヒント

(スポーツ選手の場合など)も交えて提案してください。

※AIが出力した構成に、教員ご自身の過去の教え子のエピソードなどを加えることで、より心に響く講話になります。
②学校行事の企画書・マニュアルチェック
生徒会や実行委員会が作成した企画書をブラッシュアップする際、AIに多角的な視点からチェックさせることで、安全管理や運営の抜け漏れを未然に防ぎます。

【プロンプト例:高校 生徒会顧問・行事担当】
高校の文化祭における「飲食模擬店」の運営マニュアルについて、教員(顧問)の視点からチェックすべき項目をリストアップしてください。
特に「衛生管理(食中毒予防)」「火気・電源の安全対策」「金銭トラブルの防止」「ゴミ処理・環境配慮」の4つの観点から、生徒に指導・確認すべき具体的なポイントを挙げてください。

※提示されたリストを元に生徒への指導を行うことで、生徒自身にリスクマネジメントの視点を持たせることができます。

③探究学習の「問い」の深化とサポート
2学期は探究学習のまとめに入る学校も多くなります。生徒の漠然としたテーマを深掘りするための「壁打ち相手」としてAIを活用できます。

【プロンプト例:高校 探究担当】
高校1年生の探究学習で、「地域のフードロス削減」をテーマにしているグループがあります。彼らの探究をさらに深めるため、生徒に投げかけるべき「問い」を5つ提案してください。
単なる「調べ学習」で終わらず、フィールドワークやアンケート調査などの「具体的な行動」につながるような、少し視点をずらした問い(例:消費者の心理、規格外野菜のブランディングなど)を含めてください。

④志望理由書の添削補助と面接の想定問答
三年生の総合型選抜や学校推薦型選抜

に向けた指導では、教員の負担が急増します。AIを使って多様な角度からの質問を生成し、生徒の思考を深める指導に役立てます。

【プロンプト例:高校 第3学年・進路指導】
大学の「教育学部(初等教育)」を志望する高校3年生の模擬面接を行います。以下の志望理由の要約を踏まえ、面接官の視点から、志望動機をさらに深掘りする質問を5つ、また少し答えに窮するような鋭い質問を2つ作成してください。
志望理由の要約:「自分自身が小学生の時に恩師に救われた経験から、今度は自分が子どもたちに寄り添い、自己肯定感を育む小学校教員になりたい。貴学の実践的な教育実習プログラムに惹かれている」。

※志望理由を入力する際は、生徒の氏名や受験校などの特定可能な情報は必ず匿名化してください。

⑤中間テストの記述問題アイデアとループリック作成
思考力・判断力・表現力を問う問題を作成する際、その評価基準(ループリック)をAIに作成させることで、採点のブレを防ぎ、生徒へのフィードバックを明確にできます。

【プロンプト例:中学校 社会科】
中学2年生の歴史(江戸時代の幕政改革)の中間テストで、単なる暗記ではなく「思考力・表現力」を問う記述式問題を1題提案してください。
また、その問題に対する評価基準(ループリック)を、
【A:十分達成】
【B:おおむね達成】
【C:不十分】
の3段階で、具体的な採点ポイント(キー

ワードの有無や論理構成など)とともに表形式で作成してください。

専門職として 忘れてはならない三原則

生成AIの活用においては、前号でも触れた原則を改めて確認しておきましょう。

第一に、生徒の個人情報や成績データを直接入力しないこと。志望理由書などの文章をAIに渡す際も、固有名詞や学籍番号などは避け、匿名化した事実のみを渡すのが基本です。

第二に、AIの出力には必ず事実誤認(ハルシネーション)の可能性があるため、専門的知見による確認を怠らないこと。特に入試情報や法令に関わる記述は、一次情報での確認が不可欠です。

第三に、AIはあくまで「たたき台」を担い、最終責任と教育的判断は常に教員が負うこと。AIが提示した評価基準や指導案は、目の前の生徒の実態に合わせて教員自身の手で調整して初めて機能します。

最も充実した季節を、 最も創造的な季節へ

2学期は一年の中で最も長く、生徒たちが多様な経験を通じてドラマチックに成長する時期です。行事に燃え、進路に悩み、探究に没頭する生徒たちを支える教員の仕事は、極めて高度で人間的な営みです。

生成AIという「第二の筆」を活用することで生まれたゆとりと、目の前の生徒一人ひとりの表情をよく見ること、そして対話を重ねる時間に充てていただければと思います。テクノロジーの力で定型業務や構成作業を効率化し、教員にしかできない「心を通わせる指導」を充実させる、そんな創造的な2学期となるよう応援しております。

10年後も選ばれ続ける学校づくりのための私学経営ウェビナー

無料公開のご案内

1 私学コンサル 株式会社ヒューマン・リンク 代表取締役 稲葉司 様 ～令和時代の私学経営戦略～ 9月29日(火) 12:00～13:00 10月6日(火) 12:00～13:00	2 学校法人森教育学園 岡山学芸館高等学校 様 ～探究授業を通して建学の精神を生徒へ届けろ～ 10月1日(木) 12:00～13:00
--	--

※その他多数のセミナーをご用意しております。ご希望の場合は、右記の二次元コード先のフォームよりお申込みください。

多様化する国際教育のカタチ

今や語学力の習得に留まらず「異なる文化や価値観を持つ人と協働し、正解のない課題に向き合う力を育てる教育」へと、その領域を広げる国際教育。英語4技能の習得に加え、探究学習、教科横断型学習、社会課題を扱うプロジェクトなどと組み合わせた国際教育プログラムを実践する学校が増えています。

背景にあるものは、社会が求める人材像の変化。自ら問いを立て、考え、他者に伝える力を育てることが、国際教育の重要な役割になりつつあります。

今回は、独自の国際教育を具現化・実践する「開智中学・高等学校」「花園中学高等学校」の校長先生にインタビューを行い、これからの国際教育の在り方を探りました。

探究を力に、世界と対話し、ともに答えを探す。

開智中学・高等学校 中高一貫部 校長 菅沼 健児



探究の延長線上にある、開智の国際教育。

本校にとって、探究と国際教育は別々のものではありません。開校以来約30年、教科学習や学校行事、フィールドワークなど、学校生活のさまざまな場面で探究を実践し、国際教育もその延長線上に位置づけてきました。1年次から段階的に行うフィールドワークの集大成となる5年次のイギリスフィールドワークでは、ブルネル大学の学生に英語でプレゼンテーションを行い、ディスカッションや街の探究にも取り組みます。英語を学ぶことはもちろん重要ですが、その先にあるのは、「身につけた英語を使って何をするか」。自分の考えを伝え、相手の考えを聞き、ともに考えることまでが、開智の国際教育です。

IBの理念と、開智が目指してきた教育が重なった。

国際バカロレア(IB)を導入したことも、「国際化」という時代の流れに乗るためではありません。IBには、多様な文化への理解と尊重を通じて、より良い平和な世界の実現に貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者を育てるという理念があります。その考え方が、創造型・発信型の教育を掲げ、探究や対話、学び合いを大切にしてきた開智の教育理念と重なったのです。知識を得るだけでなく、それをどう社会に生かすか。自分の主張を一方的に伝えるのではなく、相手の話に耳を傾け、対話を通して考えを深める。TOK(Theory of knowledge)をはじめとしたIBの学びには、本校がこれまで積み重ねてきた哲学対話や探究型の学びとの共通点が数多くあります。まったく新しい教育を取り入れたというよりも、30年間培ってきた教育を、世界につながる新たな枠組みの中でさらに発展させる。それが開智にとってのIB導入でした。

英語を「話す」から、ともに「解決する」へ。

IBの導入以降、国内外を問わず、異なる背景を持つ人たちと学び合う機会はさらに広がっています。韓国やチェコの姉妹校との往来に加え、海外の学校とのオン

ライン交流も積極的に実施。そこで目指しているのは、単に英語で会話することではありません。

たとえばトルコの高校生とは、デジタルリテラシーをテーマに意見を交わし、成果物を共同で制作。韓国の生徒とは朝鮮通信使について互いに調べ、情報や視点を交換しました。異なる文化や価値観を持つ相手と、一つのテーマについて考え、力を合わせて課題を解決していく。開智が大切にしているのは、単に英語で会話することではなく、対話を通してともに答えを探していく姿勢です。流暢に話せることだけが大切なわけではありません。自分の考えを伝えようとする。そして、相手の考えを聞き、受け入れようとする。その姿勢を支えているのが、探究や対話を30年積み重ねてきた開智の土台です。

真剣に向き合った先に、自然な笑顔が生まれる。

英語が完璧でなくても、物おじせずに自分の考えを伝えようとする生徒が増えています。そして、真剣に話し、相手の言葉を受け止めているうちに、ふっと自然な笑顔がこぼれます。イギリスのフィールドワークでは、数日間をともに過ごした現地の学生との別れに涙する生徒も少なくありません。そこにあるのは、用意された「国際交流」ではなく、人と人が本当に通じ合った実感です。AIやICTが発達し、情報を伝えるだけなら機械でもできる時代だからこそ、人間同士が言葉を交わし、違いに驚き、受け入れ、ともに笑えることの価値は、より大きくなるでしょう。世界の誰かと向き合い、ともに課題を解決していく。その小さな積み重ねの先に、より良い、より平和な世界がある。開智はこれからも、探究を土台にした“血の通った国際教育”を進めていきます。

開智中学・高等学校 中高一貫部

埼玉県さいたま市にある中高一貫の共学校。開校以来、約30年にわたり「探究」を教育の柱に据え、疑問を持ち、仮説を立て、検証し、発信する学びを実践してきた。近年は国際バカロレア(IB)ディプロマプログラムを導入し、探究と国際教育を融合させながら、平和で豊かな未来を創ることに貢献できる人材の育成を目指している。

近年の国際教育のPOINT

国際プログラム 導入校の増加

国際バカロレア(IB)やケンブリッジ国際教育といった、国際的な教育プログラムを一条校に取り入れる動きが進んでいます。

一度の体験で終わらせない 国際交流

国際交流の重点は、「海外体験」から「国際交流を起点とした継続的な学び」へと移りつつあります。

AI時代にこそ育てたい 人間ならではの力。

AIを活用しながら、グローバル人材に必要な資質・素養としての人間力がより重要になります。

ZENの学びを通して、しなやかで骨太なグローバル人材育成を、さらに。

花園中学高等学校 校長 中村 広記



「海外大学進学」を目指す唯一無二のコース。

2016年、花園中学高等学校は禅の教えを土台にグローバルスキルを磨いて海外大学進学を目指す『スーパーグローバルZENコース』と、先進的な探究プログラムによって思考力や創造力を高め、国内難関大学を目指す『ディスカバリーコース』を新設しました。各校が本格的にグローバル教育に取り組む流れが加速する中、本校が「海外大学進学」を目標として掲げた新コースは多くの注目を集めました。実際、新コース開設初年度から多くの方に受験いただき、入学者数を大幅に伸ばすことができました。そして、第1期生をはじめこれまでに、多くの卒業生が海外大学進学を実現。花園中学高等学校の教育は高い評価をいただくようになりました。一方、『ディスカバリーコース』においても、6年一貫の体系的な探究カリキュラムを構築し、キャリアデザインにつなげたことで、進路選択の幅を広げられました。グローバル教育を実践する上で、語学力の習得や海外文化理解に注力するだけでなく、日本独自の文化や歴史を改めて見つめ直し、日本人としてのアイデンティティを確立することは、グローバル人材としての大切な素養だと考えます。「禅の教えとグローバル教育を融合させた本校の学び」は、そういった観点で地域の皆様から評価いただき、また実際に生徒のグローバルスキル・グローバルマインド育成につながっています。

国際社会に対応できるメンタルを。

10年の歳月が流れる中、さらに次の10年、20年を見据えて私学として何をすべきか・どうあるべきか、を考えてきました。少子化による受験者数の減少は今後も続きます。数年前に登場したAIは爆発的なスピードでさまざまな分野に浸透し、シンギュラリティの到来による職業の置き換えもすでに現実のものになりつつあります。本校で中高6年間学んだ生徒は、卒業時、入学時とは大きく異なる景色を目の当たりにするでしょう。海外大学、国内難関大学のいずれを目指すにせよ、グローバル時代を生き抜くしなやかなメンタルが、これまで以上に必要です。本校は禅の教えを教育の土台にしており、『スーパーグローバルZENコース』

『ディスカバリーコース』は、通年のカリキュラムに「早朝坐禅」や「ZEN講座」を組み込むなど、実践的な指導を大切にしています。坐禅といっても悟りを目指すわけではありません。姿勢を調え、呼吸を調えると、心が調います。心が調えば、偏見やこだわりにとらわれないフラットな状態で物事に向き合えるようになるのです。この素養を身につけることで、グローバル社会の中で、自ら道を切り拓いていく人材になります。私たちはこれを「骨太の人材」と呼び、その育成をより確かなものにするため、10年にわたる経験を基に、大幅なカリキュラムの改編に乗り出すことにしました。

グローバルリーダーとしての成長を支え続ける。

10年をかけて磨き上げた両コースの学びや仕組みを見直し、実績のあるプログラムを相互に取り入れた新たなカリキュラムを2027年度から実施します。特に『ディスカバリーコース』における本校独自の「ディスカバリープログラム」は目覚ましい成果を挙げており、探究活動の全国大会「全国高校生マイプロジェクトアワード」では2024年度・2025年度の2年連続で全国Summitに出場。2025年3月には、生徒の1人が「全国優秀賞」を受賞しました。これまでディスカバリーコースでのみ実施してきた探究プログラムを『スーパーグローバルZENコース』にも取り入れ、中学1年生から高校2年生までの5年間、コース合同で学びます。私たちはこれからも、グローバル教育とともに、禅の教え、最先端の探究型プログラムを3つの柱として、質の高い教育を具現化・提供することで、未知なる未来や国際社会に前向きに向き合える姿勢・志を育み、グローバルリーダーとしての成長を支えていきます。

花園中学高等学校

京都にある共学校。臨濟宗妙心寺によって創設され、150年以上の歴史・伝統を持つ中高一貫校。「禅のこころ」を建学の精神とし、グローバル時代を生き抜く力を備えた「骨太の人材」の育成を目指すユニークな仏教系学校として全国から注目を集めている。

世界水準の学び スーパースーパーグローバルZENコース

志実現のための大学進学サポート

英検5級から
世界の名門大学へ

ディスカバリーコース 海外大学進学

国内難関大学進学 世界的企業との連携
ミッションチャレンジ

シームレスな教育体制を整え、
すべての生徒に
より深く、より手厚い、
良質な教育を提供。

禅の教えに基づく学び

いつの時代も受け継がれてきた【禅】。
グローバルマインドとしての【禅】の教えを
常に中心に据えて学びを実践します。



世界的企業と連携した最先端探究プログラム

中学3年次の「ミッションチャレンジ」では、
企業が実際に抱える課題にチームで挑戦。
課題解決力を身につけながら、
キャリア意識を育む機会となります。

TOEFL/IELTSでのスコア伸長

ネイティブ教員によるオールイングリッシュの授業や
対策講座等を通して、着実にスコアをアップ。
海外の4年制大学入学に必要なスコアを
大きく上回る生徒が多数います。



推薦・総合型選抜での難関国公立合格

大阪大学の学校推薦型選抜、神戸大学の
「志」特別選抜等で、複数の生徒が合格を果たしています。
体系的な探究プログラムは入試においても
成果を出しています。

良質な禅の学びと社会とつながる探究学習に取り組めるようになっています。
今まで以上に柔軟で強固、そしてオリジナルな中高一貫教育にぜひご期待ください。

私たちは、さらなる革新を実行します。

10年をかけて磨き上げた独自のプログラムを

両コースで共有するなどシームレスな教育体制を整備し、

すべての生徒がより深く、より手厚く、

確かな自信を持ち、それぞれの進路へ羽ばたいています。

そして迎える2027年度。

2016年、当時としては他に類を見ない革新的な新コース制を導入した花園中学高等学校は、

この10年間で次代を担うグローバル人材育成をひたむきに実践し、

海外名門大学・国内難関大学への合格実績を着実に積み重ねてきました。

生徒たちは、濃密な6年間のうち、課題解決力やグローバルマインドを身につけ、

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

国内難関大学を目指す「ディスカバリーコース」。

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

国内難関大学を目指す「ディスカバリーコース」。

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

国内難関大学を目指す「ディスカバリーコース」。

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

国内難関大学を目指す「ディスカバリーコース」。

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

国内難関大学を目指す「ディスカバリーコース」。

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

国内難関大学を目指す「ディスカバリーコース」。

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

国内難関大学を目指す「ディスカバリーコース」。

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

国内難関大学を目指す「ディスカバリーコース」。

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

国内難関大学を目指す「ディスカバリーコース」。

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

国内難関大学を目指す「ディスカバリーコース」。

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

国内難関大学を目指す「ディスカバリーコース」。

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

国内難関大学を目指す「ディスカバリーコース」。

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

国内難関大学を目指す「ディスカバリーコース」。

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

国内難関大学を目指す「ディスカバリーコース」。

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

国内難関大学を目指す「ディスカバリーコース」。

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

国内難関大学を目指す「ディスカバリーコース」。

海外大学進学を目指す「スーパースーパーグローバルZENコース」。

体系的な一貫探究プログラムを中核に据え、

花園第一章、 開幕。

新コース開設から10年。
新時代に対応すべく、
花園はさらなる革新へ。

2027年度、花園一貫は新しく生まれ変わります。

University of Toronto 合格

University of Washington 合格

京都大学 合格 神戸大学 合格 TOEFL/IELTSのスコア伸長

大阪大学 合格

日本物理学会 ジュニアセッション代表

全国高校生マイプロジェクトアワード2024

全国サミット優秀賞受賞

日経シンポジウム2026全国大会 優秀探究賞受賞

医療系・薬学系学部への合格

推薦・総合型選抜で多くの合格実績

次代を担うグローバル人材育成は、生徒一人ひとりの確かな躍進へ。

海外大学

University of Toronto [CAN]

University of Washington [USA]

University of Illinois Urbana-Champaign [USA]

University of British Columbia [CAN]

University of California, San Diego [USA]

Monash University/延世大学/Pennsylvania State University/

University of Minnesota Twin Cities/ University of California, Davis/

国立清華大学/Taylor's University/Sunway University/

Tilburg University/University of Debrecen/University of Malta 他

国公立大学

京都大学 大阪大学 神戸大学

北海道大学 大阪公立大学

京都工芸繊維大学 京都府立大学 京都府立医科大学

奈良女子大学 広島大学 香川大学 他

私立大学

早稲田大学 同志社大学 立命館大学 関西大学

関西学院大学 龍谷大学 京都産業大学 近畿大学

国際基督教大学 立教大学 佛教大学

同志社女子大学 京都薬科大学 京都女子大学 他

外部コンテストに挑戦し、複数の生徒が受賞！

全国高校生マイプロジェクトアワード

京都府最多出場

関西サミット・京都サミット 6年連続出場

▶2024年全国サミット優秀賞受賞

▶2021/2023/2024地域奨励賞受賞

日本物理学会ジュニアセッション

全国報告3年連続出場

高校生国際シンポジウム
探究全国大会

2022/2023/2025全国大会出場 京都府最多出場

日経STEAM未来への提言 西日本大会出場

自由すぎる研究EXPO 全生徒エントリー

観光甲子園 2023 全国大会出場



学校法人 花園学園

花園中学高等学校



スーパースーパーグローバルZENコース



ディスカバリーコース

〒616-8034 京都府京都市右京区花園木辻北町1番地 TEL:075-463-5221 FAX:075-464-9469

Instagram



HP



学びの場としての

新時代の大学

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

九州工業大学学長

安永 卓生

1988年東京大学理学部物理学学科卒業。1992年東京大学理学部物理学科助手、2001年九州工業大学情報工学部助教を経て、2008年より同大学教授。専門は生物物理学と計測分析DX。2022年、理事・副学長に就任し、教育接続・連携PF担当として入試制度改革やリスクリングを推進し、大学における学びの場の在り方を模索。2026年、学長に就任。

Takuo Yasunaga

問いは才能ではない ―閉じた「なぜ」と開いた「なぜ」―

「子どもたちから問いが出てこない」「探究活動を始めても、調べ学習で終わってしまう」。学校現場で、こうした声を聞くことは少なくない。では、問いを生み出すことは、一部の好奇心旺盛な子どもだけの才能なのだろうか。

私がそうではないと考えるようになったきっかけは、英会話教室に通っていたときにある。そこではさまざまな問い掛けや対話の型を練習し、教師にそれらをいつ学んだのかと尋ねると、「小学校以来、学び続けてきた」と答えた。問うことは、学び続けるスキルなのだと気がついた。

問いは、何もないところから突然ひらめくものではない。知識や経験を背景に、当然だと思っていた前提と目の前の事実との違いを見出したときに生まれる。そのため「自由に問いを立てなさい」と指示するだけでは難しい。知識、比較する対象、考えを言葉にする時間、他者との違いに気づく場が必要である。つまり、問いを生み出せる能力が育つかどうかは、子どもの才能だけでなく、教員の「問い掛け」に大きく左右される。

これまで私は、判断力を「選んだ理由を説明する力」として論じてきた。今回は、同じ「なぜ」が、どのように答えを閉じたり開いたりするのかに着目したい。

閉じた「なぜ」と、開いた「なぜ」

さて、我々教員は、しばしば授業の中で「なぜそう考えたのですか」と尋ねる。しかし、同じ「なぜ」でも、その働きは様ではない。

正解とされる理由を再現させる「なぜ」は、知識や手順を確かめるために必要であり、定着にも役立つ。一方、教員が期待する理由を当てさせるだけになれば、学習者に単に説明を迫る問いにもなり得る。これを、ここでは閉じた「なぜ」と呼ぶ。

これに対し、「ほかの方法もある中で、なぜこの方法を選んだのか」「何を重視して判断したのか」「条件が変わっても、同じ選択をするか」と問えば、いったん選んだ答えが再び開かれる。採用しなかった選択肢や、無意識に置いていた判断基準が見えてくる。これを、開いた「なぜ」と呼ぶことにする。

閉じた問いが悪く、開いた問いが善だという

ことではない。原因や手順を確かめる「閉じた問い」を足場として、比較、選択、再判断へと「なぜ」を開いていく。その往復が、「問う」力を身につける上で重要である。

正解ではなく、選んだ理由を問う

例えば、次の連立方程式を考えてみよう。

$$2x + y = 5 \cdots \cdots \textcircled{1}$$
$$5x + y = 11 \cdots \cdots \textcircled{2}$$

二つの式では、yの係数がそろっているため、式を引けばyを容易に消去できる。「なぜ二つの式を引くのか」と尋ねれば、「yを消去できるから」という説明が返る。これは手順を確かめるために大切な問いである。

その上で、「xを消す方法や代入する方法もあるのに、なぜyを消す方法を選んだのか」と問い直す。すると、「式を変形せず、そのまま引ける」「計算が少なく、見通しがよい」といった判断基準が表に出る。「①から②を引くか、②から①を引くか」「係数や符号が変わっても同じ方法を選ぶか」と続ければ、覚えた手順を別の条件でも使えるか再検討することになる。

算数でも同じである。L字形の面積は、二つの長方形に分けて足すことも、大きな長方形から欠けた部分を引くこともできる。「ほかの方法もある中で、なぜこの方法を選んだのか」と尋ねれば、図形のどこに着目し、何を分かりやすいと判断したのかが見えてくる。別の図形にも考え方を広げる問いとなる。

国語では、読点の位置をめぐって忘れられない経験がある。小学三年生の研究授業で、一人の児童とそれ以外の全員の意見が分かれ、三十分ほど議論した末、その児童が発したある一言で皆が納得した。その「なぜ」を拾い続けてくれた教師には、今も感謝している。「自分でつかんだ答えなら、一生忘れない」というマンガ「アオアシ」の福田監督の言葉に通じる。

登場人物の心情も一つに決めて当てさせるのはではなく、「別の気持ちなども読める中で、なぜその読みを選んだのか」「どの叙述を重く見ると別の読み方ができるか」と問える。複数の読みを本文の根拠によって比較すれば、感想は理由を伴う解釈へ変わる。共感マップ(SEE／HEAR／THINK・FEEL／SAY／DO)に叙述を当てはめることも、登場人物の

PAIN／GAINを考える手掛かりになる。

数学ではどの文字を消すか、算数では図形をどこで分けるか、国語ではどの叙述を手掛かりに読むか。教科は異なっても、学習者は複数の可能性から一つを選んでいる。何と何を比較し、何を重視し、なぜ選んだかを引き出して、初めて判断力が見える。

拡散と収束の間に判断がある

問いを生み出す過程は、拡散と収束の往復としても捉えられる。ブレインストーミングでは判断をいったん保留し、多くの可能性を出す。しかし、案を増やすだけでは意思決定に至らない。案を整理し、判断基準を定め、比較して選ぶ収束が必要である。

運動会の種目選びで出た多様な意見を、多数決やジャンケンでまとめるのはもったいない。得票数から人気は分かって、なぜその案が課題にふさわしいかは分からない。そこで、「安全性、楽しさ、参加しやすいさなどのうち、何を重視したか」「選ばなかった案には、どんな長所があったか」と問うことで、収束の理由が言葉になる。

ヘルソナや共感マップ、SWOTなどの思考のフレームワークも、正解を導く公式ではない。誰の立場から捉えるか、何を内部要因・外部要因と見るかなど、複雑な状況に切り口を与える道具である。

九州工業大学の総合型選抜のグループワークで用いるポジショニング解析も、ブレインストーミングで出た情報を分類するだけのものではない。何に着目し、どの切り口から関係を捉え、なぜその位置に置いたかを可視化する。与えられた軸に情報を配置するにも判断が要る。受験者自身が軸をつくるなら、「何を問題として見るか」という、さらに上位の判断が加わる。判断力は、答えだけでなく、その答えを可能にした軸のつくり方にも現れる。そのための「問い」づくりもまた大切である。

班活動を、問いが生まれる場へ

グループ活動も、単なる作業分担や意見集約で終わらせない。早く一つの結論に到達するより、「なぜ意見が分かれたのか」を明ら

かにすることに学びの価値があるのだろう。

そのためには、最初から「班で話し合ってください」としないのがよい。まず一人ひとりが自分の考えと理由を書く。可能なら複数の考えを複数の可能性から一つを選んでいる。何と何を比較し、何を重視し、「楽しさ」「安全性」「公平性」など、それぞれが置いていた判断基準が見えてくる。

その違いから、「楽しさと安全性は両立できるか」「何を公平と考えるか」「誰にとって参加しやすいか」という新しい問いが生まれる。対話の価値は相手に合わせるのではなく、他者との違いから自分の前提を発見することにある。合意形成の前には、相違点の発見が必要なのである。

「なぜ」で、次の問いを開く

改めて、開いた問いとは、答えを無限に広げるためだけの問いではない。いったん収束した判断を開き、捨てた選択肢と判断基準を確認し、条件の中でより適切な判断へ再び収束させるための問いである。

教師が「なぜ」と問うとき、正解の理由だけを回収するなら、問いはそこで閉じる。しかし、「ほかにどんな方法があったか」「何を比べて選んだか」「条件が変われば判断も変わるか」と続ければ、答え合わせだった授業が、問いを通して新たな気づきを生み、自律的な学びへと動き始める。

問いをつくる力は、限られた子どもだけの才能ではない。個人で考え、理由を書き、他者と比較し、前提の違いを見つけ、判断をつくり直す。その経験を日々の授業に組み込むことで育てられるスキルである。問う力を子どもたちに求める前に、私たち教員は問いが生まれる授業を設計し、開いた問い掛けをしているかを、自らに問い直す必要がある。

参考文献
Rothstein／Santana(2011)
Make Just One Change:Chin(2007)
"Teacher Questioning in Science Classrooms," JRST 44(6).
Chi et al.(1994)
"Eliciting Self-Explanations," Cognitive Science 18(3);
Littleton／Mercer(2013) Interthinking.

教育を変える。
未来が変わる。

Change
the future

Hideo Ikemori

株式会社ワオ・コーポレーション 代表取締役社長

池森 英雄

能開センターで近畿中学受験部門統括を務め、「算数大全」編集責任者として豊富な受験指導経験を培う。2023年9月からはWAOTECH代表も兼務し、教育とテクノロジーの融合を推進。大学生を即戦力人材として社会に送り出す取り組みも進め、創立50周年を迎える節目に「教育を変える」という大きな命題に挑み続けている。

量は足りている、配分が足りない

―日本の教育を変える最後の資源―

国が、人への投資に舵を切った

今年2月、文部科学省が高校教育改革の基本方針を公表しました。2040年を見据えた「N・E・X・T.(ネクスト)ハイスクール構想」です。昨年の経済対策を受け、2,955億円の基金が計上されました。各都道府県に基金を置き、改革を先導する拠点校を先行してつくる。日本の高校教育改革としては、これまでに前例のない規模です。

前号で私は、財務省が示した「2040年までに私立大学を250校縮減」という数字を取り上げました。大学が縮む一方で、高校には過去最大級の予算が入る――国はいま、人への投資に明確に舵を切ろうとしています。教育に人生を賭けてきた者の一人として、私はこの転換を心から歓迎します。

その上で、私たちが共に引き受けなければならない問いがあります。この2,955億円は、10年後に何を生むのか。教育を投資と呼ぶのなら、リターンを求める覚悟が要ります。私は確信しています。この問いに答えを出せるかどうかで、日本の次の30年が決まる、のだと。

為替の錯覚を剥がすと、日本の通信簿が現れる

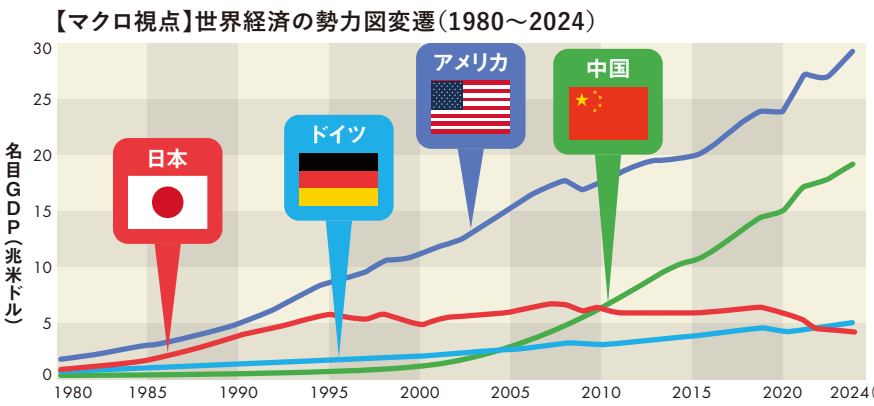
日本の30年を、ドル建てのGDPで語るが増えました。世界2位から4位へ。数字だけを見れば、この国は後退したことになります。しかし、これは真実の半分にすぎません。ドル建ての数字は為替に激しく揺さぶられます。かつて超円高の局面では、国内経済が成

長したわけでもないのに、ドル建てGDPは過去最高を記録しました。いま起きているのはその逆で、歴史的な円安が日本を実際より小さく見せています。円建ての名目GDPは、むしろ600兆円を超えて過去最高水準にあります。円高がつくった膨張と、円安がつくった縮小――その両方に、私たちは一喜一憂してきました。

では、為替という雑音を取り除いたとき、何が残るのか。一人当たりGDPの平均成長率です。この30年、日本は年0.7%でした。アメリカの半分以下、G7で最低の水準です。この数字だけは、為替のせいにはできません。一人の人間が一年でどれだけ多くの付加価値を生み出せるようになったか、それだけを測った数字だからです。

私はこの0.7%を、日本の通信簿だと受け止めています。厳しい数字です。しかし、この現実から目を背けてはなりません。

一方で、世界は教育の値打ちを、数字で正確に把握しています。世界銀行が139か国の研究を統合した体系的レビューによれば、就学年数を1年増やしたときの収益率は、世界平均で年約9%。株式や債券の長期平均リターンを、大きく上回ります。教育は情緒や理想の問題ではありません。実証研究が繰り返し検証してきた、最も利回りの高い長期投資なのです。ところが日本の教育支出は、対GDP比でOECD平均を下回り続けてきました。社会人の学び直しを支える公的職業訓練に至っては、対GDP比0.01%。年9%で回る投資対象を前にして、私たちは30年間、資金を投じてこなかった。0.7%という成績は、その必然の結果ではないでしょうか。



【配分革命】――

量は足りている。足りないのは配分だ

ここからが、私が最も伝えたいことです。IMDが今年公表した世界競争力ランキングで、日本の強みの第2位に挙げられたのが「中学・高校の就学率」でした。世界70の国と地域の中で、トップランクです。大学進学率も、女性が男性を上回っています。教育の「量」において、日本は間違いなく上位国です。

問題は、その先です。同じOECDの統計で、高等教育のSTEM修了者全体に占める女性の割合はわずか7.7%。工学、修士、博士後期――社会が最も必要としている領域における女性比率は、いずれもOECD加盟国の最下位圏に沈んでいます。

進学率では上位、STEM・修士・博士では最下位――。この落差こそが、日本の教育が抱える構造の正体です。私たちは「教育参加の量」を増やすことに成功した。しかし「参加内容の質と配分」を設計してこなかった。ここに手をつけない限り、0.7%は動きません。そして、ここにこそ希望があります。先の世界銀行レビューは、女性の教育収益率が男性より約2ポイント高いことを、各国のデータで繰り返し確認しています。最もギャップの大きい層に投じたとき、投資の効果は最大になる。資源のない国と言われ続けてきたこの国に、まだ手つかずの資源が眠っているのです。

眠っているのは、女性だけではなく、前例に縛られ、「まだ早い」「前例がない」と押さえつけられてきた若者たちも同じです。人数は減っている。しかし、一人ひとりの伸び代は、まったく使われていません。

私たちに必要なのは、総額を増やせという要求ではありません。【配分革命】です。同じ一円を、どこに配るか。誰の可能性を解き放つか。それを決めることが、時代を変える一手になります。その上で、投資が成果に変わる条件を真剣に考えなければなりません。変化を受け入れることのできる人と、変化を許容する仕組み。この二つが揃った場所にしか、投資は根を張りません。そしてこれは、学校だけの仕事ではありません。国が制度をつくり、

自治体が計画を描き、大学が門戸を開き、企業が現場を提供し、私たち民間教育が接続を担い、家庭が子どもたち・女子たち・男子たち―に選択肢を見せる。人的資本の形成は、社会全体で引き受ける国家的事業です。

変えるべきは、

この国の【マインド】です

先ほどのIMDランキングには、続きがあります。同じ表の反対側、日本の弱みとして並んでいたのは、「企業意思決定の速さ」「事業機会とリスクへの対応力」「市場環境の変化への認識力」「上級管理職の国際経験」――いずれも70の国と地域の中で最下位圏でした。私は、この一覧を読んで背筋が凍る思いがしました。決められない。変えられない。挑戦するより、右に倣う。決めても実践しない。この30年、日本を沈めてきたものの正体が、そこにすべて書かれていたからです。技術は世界一級。就学率は世界2位。それでも、変化に対応する力だけが決定的に欠けている。

ならば、私たちのやるべきことは明確です。変化に対応できる人を育てる【教育機会】をつくること。そして、学んだことを実際にやってみる【実践者】を育てること。知識を持つ人ではなく、動ける人を送り出す。それが、教育に携わる私たちが引き受けるべき責務です。かつて本欄で、私は【マインド分布】という言葉を使いました。人口分布は変えられなくても、マインドの分布は変えられる。と。いま申し上げたいのは、その先です。必要なのは【マインドの変化】を支え続けることです。理系に進みたい女子生徒に、選択肢を見せる。「前例がない」と言われた若者の背中を押す。彼ら彼女らが日本の成長に貢献したいと思える場を、私たちの手でつくり続ける。

高校生も、大学生も、若い社員も、数は減っています。だからこそ、一人も眠らせてはならないのです。量は足りている。足りないのは、配分と覚悟です。眠っている資源を起こすのは、私たち大人の責務です。教育を変える。地域を変える。未来を変える。その一歩を、皆さまで共に。



日本の部活動こそ探究！②

前号でも書きましたが、私は卓球場に足を踏み入れない顧問の下で中高大と卓球部に所属し、それなりに成長できたと感じています。そんな私なので、現在の「部活動の地域移行」、「外部指導者化」には、違和感を持っています。理想は、生徒の主体的な取り組みとしての「部活動」。常翔学園高校卓球部顧問を24年間務める中で、ある程度形にできたと自負しています。拙い取り組みですが、皆様のご参考になれば幸いです。

暗黒期 (4年連続初戦敗退)

高校男子が大半の卓球部顧問になった年の新入部員は15人で、卓球経験者の私が顧問になったことで早期引退していた3年生も戻ってきました。3年の中には技術が高い選手もいたので団体戦に出てもらったのですが、メンタルが弱過ぎて一回戦のラストで負けてしまいました。日々の練習の大切さを実感し、生徒主体と放任の違いを体感しました。

幸い、2年目以降入部者は多く居ました。これは1学年15クラスで8割男子、8割理系の学校だから、当然と言えば当然です(経験上、普通の男子卓球部には理系の生徒が多い)。しかし残念ながら、練習時間に何故かソフトボールをする。部室でバウプロ大会をする等の不祥事が続きました。2年目の夏の個人戦は、8人が出場して1勝8敗。エースが1回戦を勝った以外は、全員初戦敗退。優勝は目指さなくとも、1勝する為の動機が無い。だから、練習にも身が入らず結果も出ないのだと感じました。その試合の後「せめて5割を目指そう」とミーティングで語りました。すると1年後に勝率5割となり、以降は5割を下回った事はありません。有力選手が多く入部した訳ではなく、気合と応援だけは大阪で一丸になれていたからだと思います。「あんなら、元気良いなあ」と、強豪校の保護者に観客席からの応援を褒められたのが当時の自慢です。彼らに勝ってほしい思いから、「日々の練習は生徒自身で行うもの」というポリシーを捨て、私も毎日練習に参加して技術指導も行いました。しかし、インターハイ

予選の団体戦は4年連続初戦敗退。「先生があそこに座ったら、俺たちも勝てるようになるんじゃないですか」と本部を指さす生徒達に促され、大阪高体連卓球専門部の門を叩きました。15年間の役員生活で、会計7年、事務局6年、副委員長2年と良い経験を積ませて貰えたことは、私の財産になっています。

迷走期 (10年連続ベスト16)

高体連に入れてもらい、練習試合が格段に増えました。夏休みも日曜日も、練習試合が公式戦。部活引率を仕事とするなら、年間で休みが20日位しかない生活になりました。そこまでやったのですが、団体戦は10年連続で大阪ベスト16。大阪では上位8校が近畿大会に出場できるので、10年連続で悔しい思いをしました。シングルス・ダブルスを合わせると、「あと1つ勝てば近畿大会」という試合に100試合位負けました。何が足りないのか。遠征、大学の卓球部に相手をしてもらう等、がむしゃらに色々増やしても勝てない。

こんな窮状を変えてくれたのは、本業の忙しさでした。常翔学園スーパーコース1期生の担任となり、終礼が終わるのが17時半。平日の部活には出られなくなりました。そこで私の役割を、試合引率、書類作成、備品購入等と、割り切りました。生徒を勝たせたくて、自分が顧問にやって欲しかったことをしていたつもりでしたが、逆に自分が顧問無しだったお陰でできたことを、部員が経験できなくなっていました。「日々の練習は生徒自身で行うもの」、というポリシーに立ち返ることができました(他の顧問も見守ってくれました)。

創造期 (10年連続近畿大会出場)

10年連続でベスト16を味わった後、常翔学園卓球部に経験者の先生が着任しました。彼に男子監督になってもらおうと、ベスト8入賞。更に翌年はベスト4！負けていた理由は、どうやら私だったようです(笑)。そして私は女子の監督になりました。その頃の大阪の



卓球界には、「女子が高校で卓球を続けてくれない」という共通した悩みがありました。有難い事に「常翔の女子卓球部に入れば近畿大会に行ける」と中学の先生達が勧めてくれるようになり、10年連続で男女とも近畿大会に出場することができました。

ある秋の大会の会場準備前、「田村先生、久しぶりです〜!」と女子部員に大声で言われました。確かに夏の大会以降、一度も練習に行ってなかったので部員の顔を見るのも久しぶりでした。「そんな、他の学校の前で言わないですか〜」とお互いに笑いながらの会話ですが、他校の生徒と先生方は驚いていたと思います。その大会は、準優勝でした。

生徒主体の活動で結果が出せたのは、部員達が部活運営も自分達でやるという自覚が高くなったからだと感じます。1年生の初めての役割を、試合引率、書類作成、備品購入等と、割り切りました。生徒を勝たせたくて、自分が顧問にやって欲しかったことをしていたつもりでしたが、逆に自分が顧問無しだったお陰でできたことを、部員が経験できなくなっていました。

生徒主体の活動で結果が出せたのは、部員達が部活運営も自分達でやるという自覚が高くなったからだと感じます。1年生の初めての役割を、試合引率、書類作成、備品購入等と、割り切りました。生徒を勝たせたくて、自分が顧問にやって欲しかったことをしていたつもりでしたが、逆に自分が顧問無しだったお陰でできたことを、部員が経験できなくなっていました。

部員も多くなり、自覚も高くなってきたので、私の顧問としてやることも変化しました。卓球台が余っていると聞けば、軽トラで譲ってもらいに行きました。全部活共通の雨天練習場は、どうやら私だったようです(笑)。そして私は女子の監督になりました。その頃の大阪の

軍は別々の学校へ行き、同時に3つ行う事もありました。平日に出身中学で練習することを許可して常翔学園の人口密度を減らしつつ、母校には高校生が来てくれたと喜んでもらいました。近くのスポーツセンターに交渉し、閉館日の夜に特別に使わせてもらいました。常翔学園が後援する淀川国際ハーフマラソンでは、部員全員のボランティアスタッフまたはランナーとしての出場を義務付け、自分達の学園を盛り上げる気持ちを養いました。

そんな顧問生活で一番の嬉しい思い出は、初心者3人を含む出場した40人全員が初戦突破した団体予選です。団体戦に出られなくても、レギュラーになれなくても、部員一人ひとりが一所懸命に部活動に取り組んでいることを、結果で証明してくれました。全員が世界一、日本一を目指す訳じゃない。「卒業後の長い人生を生き抜く力を少しでも高める為」に中高の部活動がある、と私は考えます。

トキワ松学園の部活動

トキワ松学園中高のダンス部と写真部は、毎年全国大会に出場しています。活動は週5日まで、大会以外の日曜の活動禁止、朝練なし、18時完全下校という制約の中、先輩が後輩を指導しながら全員で高め合う活動をしています。なお、このコラムの私の写真は、写真部の生徒に撮ってもらいました。入部する部活(テーマ)を選択し、高い目標を達成する為の活動(問い)を自分達で考え、それを日々実行して大会にぶつける(検証)。理想的な探究活動としての部活動が、トキワ松にはありました。これからの中高の部活動はこの方向で、と私は考えます。



教育現場にも、 広報の専門家を！

どんな学校や塾が、広報に弱いのか？

TikTokより先に、Zoomです

私が経営する株式会社リクメディアは、通信制高校の合同説明会事業を全国で展開しているため、通信制はもちろん、全日制の中高や学習塾、大学の経営層とも日々お話しします。その中で分かったことは、広報が弱いのは、生徒募集に困っている学校や塾だけではなく、偏差値の高い私立中高、指導に定評のある学習塾ほど、実は広報が弱いのです。

理由は、広報に力を入れる必要がなかったからです。教育力と偏差値が生む口コミが、広報を代行してくれました。しかし今、保護者や生徒のニーズは多様化しています。口コミが伝えるのは過去のニーズ・実績で、それだけでは選ばれない時代になってきています。

Webマーケティングや広報と聞くと、TikTokやInstagramを思い浮かべる方が多いはずです。問題はもっと手前にあります。「来月オンライン説明会を開くとして、ZoomのURL発行から当日の進行まで、外部に頼らずできる職員は何人いますか」と聞くと、即答できる経営者は意外と少数です。しかも本番では音声の途切れなど不測のトラブルが起き、想定以上の慣れが要ります。

対面での学校説明会に来るのは志望度の高い層で、迷っている層に届くのは入口の軽いオンラインです。ところが多く現場で、担当は持ち回りです。経験のないまま本番を迎え、原稿の棒読みになります。魅力が伝わらないだけでなく、まだ良いのですが、実際には

「この学校はZoomも使えないのか」と受け取られ、信頼まで下がってしまいます。また理想は、Zoomの開催に加えて、案内用の特設サイトと受付のGoogleフォームまで自前で揃う状態です。場合によっては、SNS広告の運用も必要です。

企画から報告書まで、自前でできる

特設サイトを作るのに、エンジニアは要りません。今はAIで、非エンジニアでも十分なものを作ることができます。説明会の企画から、案内サイトと申込フォーム、ポスター、Instagram広告の運用、ZoomのURL発行と当日のトラブル対応、アンケートと報告書まで、業者に頼まず自前でこなせます。学ぶのは生成AIの使い方とWebサーバーの基礎だけ。詰まったらAIに聞けば、すぐにできるようになります。

ただし、セキュリティと個人情報の観点は重要で。例えば、申込フォームには生徒の氏名や連絡先が集まります。共有設定を一つ間違えれば、外から見えてしまいます。この点については、専門家から一度しっかりと学ぶ必要がありますが、基本ができれば、あとは自走できます。

コロナ禍で開いた差は、AIでさらに開く

広報のスキルは、コロナ禍で現場ごとに差がつかしました。必要に迫られてオンラインを

鍛えた現場と、元に戻って終わった現場です。AIの登場で、差はもう一段開きます。ハードルは下がっても、始めるかどうかは組織の判断だからです。分かれ目は、業者に任せ続けるか、自校で育てるかですが、自校で育てた広報の専門家が周りに教え、最終的には誰もができる状態にするのがベストです。

広報の専門家にするのは、今いる事務職員が良いと思います。自校のどこが魅力なのか、外部の広報経験者より知っているからです。ただし、必ず二人以上にしてください。一人に任せると、退職した日に積み上げが全部消えます。広報の属人化は、最も高くつくりリスクです。

失敗が一番安いのは、今年です

育成に、長い時間は要りません。私が運営するオンライン合同説明会でも、初登壇の先生は開始前から台本を握りしめています。それが二回目は、台本を読む先生がほとんどになります。そのほうが保護者に伝わります。原稿を読み上げる授業が生徒に届かないのと、同じ理屈です。

たった二回で一気に良くなります。始めるなら、多少の失敗が目立たない今です。オンライン説明会も、AIで特設サイトを作るのも当たり前になる来年、再来年に、自校だけできない状態が一番高くなります。まず、広報の専門家を指名するところから。教育現場にも、広報の専門家を！



合資会社マネジメント・ブレイン・アソシエイツ 代表

中土井 鉄信 Tetsunobu Nakadoi

2001年、自らの理想を実現するため教育機関専門のコンサルティング会社として合資会社マネジメントブレイン・アソシエイツを設立。アドラー心理学・教育学・発達心理学等の研究から「セルフ・エスティーム(自己重要感・自己有能感)」を高めることが教育の使命だと確信し、この考えを基に学習塾や学校のコンサルティングを行い、成果を上げ続けている。

情報を客観的に 伝える視点！

8月3日に、文科省が、全国学力調査の結果を公表し、そのことに関しての新聞報道があった。今回は、その報道を参考に、情報を客観的に伝える視点について考えた。

以下、8月3日の朝日新聞のデジタル版の記事を引用することにする。まず、題名が「動画・SNSの時間長いほど低い正答率 学力調査 端末活用なら高く」というものだ。

記事には、SNSや動画の視聴時間が長い児童生徒ほど、各教科の正答率が低い傾向があり、一方、タブレット端末などを学習で活用することが出来る児童生徒ほど、正答率が高い傾向が見られたとある。もう少し詳細に言えば、1日4時間以上、スマートフォンでSNSや動画を見る児童生徒の正答率とスマートフォンでSNSや動画を1日30分より少ない時間に見る児童生徒の正答率を

比較して、長時間視聴している方が、正答率が低いというのだ。そして、他教科でも視聴時間が長いほど、正答率やスコアが低い傾向があるというのだ。

この記事を読んで、私は単純にそこに因果関係はあるのだろうかと思うのだ。ここから、客観性の始まり、つまり、情報を鵜呑みにしないということだ。視聴時間が長ければ長いほど、勉強時間が少なくなるというのは、わかる。なぜならば、時間という土俵に乗った関係だからだ。因果関係としては、勉強時間が多或少なにかにあるのであって、スマートフォンの視聴が、直接正答率と因果関係があるように書くのは、どうなのだろう。そこに、記者の主観が入っているのではないのか。

また、タブレット端末で文章作成や情報の整理が出来る児童生徒の各教科の正答率

が高い傾向にあるとあるが、これまた因果関係が明確なのかはわからない。タブレット端末で作業ができる児童生徒は、その作業で学力が高まったというべきか、学力が高いからこそ、タブレット端末を使おうとしたのか、よくわからないからだ。

この全国学力調査の結果やアンケートから言えることは、勉強時間をある程度取っている児童生徒の集まりが正答率が高いグループで、勉強時間があまり取れない児童生徒の集まりが正答率の低いグループだということしか言えないのではないのか。スマートフォンでSNSや動画を視聴する時間が多いから正答率が低いというより、勉強時間が、スマートフォンでSNSや動画を見ることで削られているから、正答率が低いというのが、いたって普通の結論ではないのか。

最後に、文科省の担当者のコメントがこの記事の締めくくりの方に載っているのだが、この発言もちょっとと無理がないだろうか。





Nobuyasu Morigami



株式会社森上教育研究所 所長

森上 展安

1953年岡山県生まれ。早稲田大学法学部卒業。東京第一法律事務所勤務を経て都内で学習塾「ぶQ」を経営後、88年に(株)森上教育研究所を設立。中学受験・中高一貫の中等教育を対象とする調査・コンサルティング分野を開拓した。私塾・私学向けに「中学受験と私学中等教育」を月刊で発行している。中学受験生の父母対象に「わが子が伸びる親の[技]」(スキル)研究会」セミナーをほぼ毎週主催。著書に「10歳の選択 中学受験の教育論」、「中学受験入りやすくお得な学校」(いずれもダイヤモンド社刊)。

男子難関志向一層強まる ～女子も難関にシフト

7月に大手模試が行われ、その第一志望者数分析をしたところ、男女とも改めて難関志向の強さが増えていることが鮮明になった。

男子

慶應普>海城>麻布

第一志望者数の変化は受験者数の変化のものではないにしても、コアな入学希望者がどれだけいるかという情報であり、学校運営者にとってこれだけ頼もしい情報もないと思う。

はじめにお断りしておく、筆者はその第一志望者数のご提供を、四谷大塚とサピックス、ONETESから頂戴している。これらのうち、7月模試に関しては四谷大塚とサピックスにお願いして上位20校程度の第一志望者数の変化をこの数年リサーチしている。

この7月模試の第一志望者数の変化を、まず男子についてみると、最難関中学に注目したところ、ほぼ全校で第一志望者数が増加していることがわかった。

そもそも、最難関校(ここでは四谷大塚80%偏差値65以上)の受験者数は直近でみても大幅に増加しており、その理由としてほぼ毎年1校ずつくらい偏差値65以上にランクされる学校が増えてきた、というこれ以上ない理由は確かにあるけれども、そもそも全体の総受験者数がほぼ横ばいの現状で、難関に比定される学校の校数が増えようが学力相応の受験者数は、全体の母集団が一定であれば、最難関とされる上位6.7%の受験

者数も動かない。

しかし実際は、校数の増加にともない、受験者数が増大しており、しかし今春は新たに偏差値65入りする学校はなかったにもかかわらず、今春も最難関校の受験者数はどのランクよりも伸びが大きかったランクであり、男子の全受験者数の最大数になっている。その原動力が男子校男子で、共学校男子はこの2年はほとんど変化がない。

以上が全受験者数の動向だが、その増減を占う意味でも第一志望者数の動向は貴重な資料だ。

さて、改めて7月模試で男子最難関校の第一志望者が鮮明に増えている。

具体的にはトップの開成が739名(2024)→810名(2025)→865名(2026)と、特に今回の増加幅が大きい。このように2年続けて伸びているのは他に海城があって、419名→439名→459名とまるで測ったように20名ずつ増加している。

この海城に逆転されたのが麻布で、麻布は453名→426名→433名だから、ちょうどこの2年で海城と攻守をかわした観がある。

しかし、その海城を一気に上回ったのが慶應普通部で、472名→411名→464名と3年前に急浮上して昨年はその反動で沈み、今回はまた大きく復調している。これらを上回ってこのところ開成に続く2位を維持しているのが早稲田で547名→586名→543名と前年比減とはいえ高値安定している。

一方で駒東、武蔵は募集定員が少ないこともあって順位は6〜7位といったところだが、

それをいえば慶應普通部も180名定員だからむしろその突出ぶりに驚くべきか。駒東398名→387名→395名、武蔵391名→417名→359名で、いずれも400名を前後して手堅い支持層があるとも言える。

最後に早稲田大学高等学院中学部は337名→314名→330名。ここはおそらくもっと伸びると思われる。慶應普通部の伝統こそないが、何と言っても教員がすべて早大でも講義をもっている究極の一貫指導校で、その点でまさに他にないユニークさだからだ。

洗足の健闘が光る

女子難関校

女子難関校に目を転じると、男子同様というより男子以上に増加が鮮明だ。それは今春のサンデーショックで、2月1日のプロテスタント有力女子校が2日に移動して、残った1日難関校も移動した2日移動校とともに第一志望者数は増加基調だった、ということがおさえておく必要がある。具体的に男子同様24年入試→25年入試→26年入試の第一志望者数の変化を桜蔭、女子学院、雙葉、洗足の順にあげる。桜蔭415名→406名→429名、女子学院482名→500名→514名、そして雙葉は248名→189名→228名、洗足は154名→173名→196名。これで気づくことは、今春の入試を目指していた昨年7月の第一志望者数の変化で、雙葉が59名減少した一方、洗足が19名増加していたことだ。ここに、準難関の鷗友の第一志望者数の変化269名→286名→244名を考え合わせると、昨年7月時点で鷗友の第一志望者数が17名増加していることがわかる。雙葉減少分59名から洗足増加分19名と女子学院18名増を引いた22名のうち、この鷗友の17名が隠れていると考えてよいと思う。

こうしてみると、洗足はサンデーショックというまととないチャンスで第一志望者数を増やし、今回7月もその数を維持している。一方で、鷗友も昨年のサンデーショックで第一志望者を増やしたが、今回7月の第一志望者数は一昨年を下回っている。1日の定員減という要項変更はあったにせよ、否だからこそ第一志望者数を一昨年並みに維持したいところだ。

ところで準難関3校のうち残り2校も挙げておくと、まずフェリスが168名→141名→190名と今回大きく第一志望者数を伸ばしている。次に吉祥女子は326名→327名→304名とやや減少となった。

かくしてサンデーショックを経て、洗足とフェリスが大きく第一志望者数を増やしていて、加えて洗足196名に対してフェリス190名とやや洗足が上回っている。2年前は168vs154とフェリス優位だったが、わずか6名にせよ、洗足がフェリスをサンデーショックを経て上回ったことになる。

こうしてみると、女子の動きは東京で2日の豊島岡女子をのぞいて難関校すべてで増加の一方、吉祥女子、鷗友という準難関校が伸び悩んだことがわかる。また、神奈川の難関洗足と、準難関のフェリスが鮮明に増加している。

言い換えれば、東京・神奈川の1日最難関校はすべて増加していることになる。男子も女子も最難関校第一志望者増で、当然ながら不合格者が今春以上に増加するのは確実に、2月1日午後入試をヘッジして合格校を確保する動きが一段と増すと思われる。

公開シンポジウム

『これからの国際化教育を考える』

日時 2026年11月1日(日) 13:30～16:30

会場 明星学苑 児玉九十記念講堂

対象 特に小学生保護者並びに教育関係者

第一部／パネルディスカッション

パネリスト
熱原 一利 元青山学院常務理事
柳沢 幸雄 元開成中学校・高等学校校長、現北鎌倉女子学園園長
江川 雅子 元東京大学理事、現成蹊学園学園長
斉藤 淳 元エール大助教教授、現JPREP代表取締役

第二部／実践編

室崎 摂 元渋谷学園渋谷中学高等学校 教諭、現明星Institution中等教育部副校長
成蹊中学・高等学校教諭(調整中)
高崎朋彦 開成中学校・高等学校教諭

締めのご挨拶

落合 一泰 元一橋大学理事・副学長、現明星学苑理事長

主催 NPO学校支援協議会 協力 明星学苑、成蹊学園
後援 森上教育研究所

お問い合わせ先

メールアドレス: ent@ss-c.org 宛にお問い合わせください。折り返し、申込方法をご案内いたします。



特別対談

東京大学の合格者数が急増する本郷の「文武両道」と「自学自習」。

木村 友彦

Tomahiko Kimura

本郷中学校・高等学校校長

近年、東京大学の合格者数が飛躍的に伸びた本郷中学校・高等学校。その背景には、生徒一人ひとりの可能性を引き出す「文武両道」「自学自習」の教育と、卒業生から後輩へと受け継がれる「諦めない心」があります。今回は、明星Institution中等教育部校長、明星中学校・高等学校校長の井上一紀氏が、本郷中学校・高等学校の木村友彦校長を訪ね、創立100年を超えて受け継がれる教育について伺いました。

井上 一紀

Kazunori Inoue

明星Institution
中等教育部校長、
明星中学校・
高等学校校長／
元渋谷教育学園
幕張中学校・高等学校
校長補佐・進路部長

100年を超えて受け継ぐ建学の精神。「社会に貢献できる人材」を育てる。



井上:明星Institution中等教育部校長、明星中学校・高等学校校長の井上です。今日はどうぞよろしくお願いします。

木村:本郷中学校・高等学校校長の木村です。どうぞよろしくお願いします。

井上:では早速、質問に入らせていただきます。創立から100年を超えた本郷中学校・高等学校の建学の理念をお教えいただければと思います。

木村:はい。大正時代の言葉ですので、少し古く感じられるかもしれませんが、創立当初は「個性を尊重した教育を通して、国家有為の人材を育成すること」を掲げていました。現在では、それをもう少し広く捉え、「社会に貢献できる人材の育成」を目指して教育活動を行っています。

井上:この建学の精神は、ずっと変わらずに受け継がれてきたのですか。

木村:そうですね。100有余年にわたり、一貫して引き継がれてきたものです。

井上:この建学の精神を踏まえ、本郷中学校・高等学校の教育方針の特徴を教えてください。

木村:生徒には、「自分にしかできないことにつながる力が、必ず自分の中に眠っている」と伝えています。その力を自分の中で育て上げる姿勢を大事にしてほしい、と。中高6年間の一貫教育で高校入試がありませんので、さまざまなことに挑戦してほしいと思っています。うまくいったときは、さらに次の目標へ向かう。うまくいかなかったときは、なぜダメだったのかを考え、自分なりに修正・改善する。そうして経験値を高めてほしいと伝えています。

井上:明星学苑にも「実践躬行」という教育方針があります。陽明学の言葉で、自分で考え、良いと思ったことをどんどん行動に移さないという意味です。通じるものがありますね。

木村:自ら考え、行動に移すことを重視する点は、共通していますね。

井上:大正新教育の考え方でいながら、現代の最先端の教育にも通じるということですね。

木村:はい。時代を越えて大切にすべき教育の考え方だと思います。



勉強だけでも、スポーツだけでもない。仲間と挑み、経験値を高める「文武両道」。



井上:確かに大事なポイントですね。学校の資料を拝見すると、「文武両道」を校是とされていますが、本郷の「文武両道」とは、具体的にどのようなのですか。

木村:一般に「文」は勉強や学習、「武」はスポーツと捉えられますが、本校では「武」をもう少し広い意味で捉えています。学校は、仲間と切磋琢磨し、時間と場所を共有できる場です。勉強以外の活動の象徴がクラブ活動であり、委員会活動や年間の学校行事も含め、手を抜かず一生懸命取り組みましょうと伝えています。その中で、仲間と協働する楽しさや、皆で目標に向かって努力する過程を大事にし、経験値を高めてほしい。勉強だけでなく、クラブ活動や委員会活動、学校行事にも一生懸命取り組む。それが、本校の「文武両道」です。

井上:特に力を入れている部活動はありますか。

木村:特定のクラブを強化しているわけではありません。本郷は伝統的にラグビー部やサッカー部のイメージが強いと言われており部員数も多いですが、すべての運動部が活発に活動しています。一方、文化部も数多くあり、科学部や地学部、社会部は全国レベルの多様なコンテストに挑戦して評価を得ています。

6年間で「自立した学習者」へ。自学自習を支える生活習慣と教員の伴走。



井上:ありがとうございます。そして、「自学自習」と「生活習慣の確立」を指導方針に掲げていると伺いました。どのような工夫をされていますか。

木村:「自学自習」といえば「勝手に勉強しておきなさいという学校ですか」と聞かれますが、そうではありません。6年間かけて、自学自習のできる人、自立した学習者になってもらうための指導を行っています。自分で勉強を続けるには、内発的な動機が必要です。そのきっかけになるのは、うまくいった体験ですし、うまくいかなかった経験も次のステップに向けて大切です。自分の取り組みを見つめ直す内省力を身につけてほしいと考えています。そして、「文武両道」と「自学自習」を実現するには、きちんとした生活習慣が欠かせません。私は朝礼などで、生徒に「毎日を刻みつけるように生きてほしい。かけがえのない1日を大切にしてほしい」と話しています。朝起きてから「今日は何をしよう」と考えるのではなく、例えば定期考査の2週間前なら、どの教科の何に取り組むのか、どのような手順で進めれば効率上がるのかを考える。やるべきことを可視化して日々を大切に生きてほしいと願い、「生活習慣の確立」と表現しています。

井上:さらに、独自の手帳を作っているのですか。

木村:そうですね。これまでは学年ごとに統一した手帳を作っていましたが、現在は学校全体で共通の手帳を作っています。生徒証も収納でき、同じものを使うことで一体感を持たせています。

井上:今年、明星学苑に新たに開設した明星Institution中等教育部でも、生徒に手帳を持たせています。

木村:そうですね。

井上:今の生徒は手帳を使わないイメージもありますが、自分で書き、きちんと報告する。自分の考えを書いて伝えることは、やはり大事だと思います。

木村:大事ですね。

井上:生活習慣を整えるために手帳を使わせているのですが、まさに本郷中学校・高等学校さんがお手本だと思いました。

木村:とてもでございます。最初は1枚の紙から始まり、学年ごとの統一手帳を経て、現在は学校全体の統一手帳になりました。使い方はさまざまですが、よく見られるのは授業中に先生が「今日学んだ単元の小テストを1週間後に行う」と伝え、生徒がすぐに手帳を出して小テストの日程を書き留める姿です。これが第1歩です。やるべきことを言語化・可視化するために手帳を使ってもらっています。

井上:一方で、オンラインでの情報伝達にはどのような手段を使っていますか。

木村:入学時にChromebookを購入してもらい、端末を持たせています。高校ではBYODで自分の端末を持ち込みますので、Chromebookを継続して使う生徒もいます。Google Classroomなどを使い、連絡事項を伝えています。

井上:紙とデジタルをうまく使い分けているのですか。

木村:はい。それぞれの良さを生かしながら活用しています。

井上:ここからが今日の本題になると思います。本郷中学校・高等学校の大きな特徴は、この4、5年で東京大学の合格者数が飛躍的に伸びたことだと捉えています。木村校長は、この結果をどのように分析されていますか。

木村:そうですね。突然、20人を超える数字になったわけではありません。これまでにさまざまな取り組みがあり、悔しい思いをした生徒もたくさんいます。そうした生徒たちから話を聞き、再現答案を含め、さまざまな情報や資料を蓄積してきました。そのうえで、教員が一人ひとりをしっかり見つめて対応してきた結果だと思います。もちろん、生徒たちの頑張りもあります。生徒と教員集団がしっかりと協力体制を築いたことが、現在の結果につながっているのだと思います。

対談の続きは動画をご覧ください。

森上教育研究所
(親のスキル研究会)
YouTubeチャンネル

※私教育新聞では全体の20%程度を掲載しています。完全版は森上教育研究所チャンネルでお楽しみください。



教育の「今」を学べる、「未来」に気づける3日間



第9回

EDIX 大阪

教育 総合展

2026.10.13(火)～15(木) グランキューブ大阪

展示会 10:00～17:00 / セミナー 9:00～18:30(プログラムによって変動)

主催 EDIX実行委員会

企画運営 RX Japan合同会社

後援 文部科学省/経済産業省/総務省/デジタル庁/ICT CONNECT 21/超教育協会/大学ICT推進協議会 など(順不同。法人格略)

EDIXは教育分野に特化した展示会とセミナーのイベントです。
教育のトレンドだけでなく、今悩みの課題解決につながる情報やヒントが見つかります。

出展予定製品・サービス

- 校務DX・事務DX・授業DX
- セキュリティ・ネットワーク・Wi-Fi
- ICT機器
(PC・タブレット端末・電子黒板・プロジェクター・周辺機器)
- 教材・コンテンツ
- 探究学習・STEAM
- 学校施設/備品・学校向けサービス
- 人材育成・研修・リスキリング ...など

【全30講演以上】開催セミナー

基調講演・特別講演 <セミナー講師一部抜粋>

日本の教育の現状と展望
～新たな学習指導要領の策定に向けて～東京大学公共政策大学院
教授
(前・文部科学大臣補佐官、
元・文部科学副大臣)
鈴木 寛学校はここまで変えられる！
これからの時代の学校のあり方(株)アカデミア・ネクサス
代表取締役
元広島県教育長
平川 理恵日本の学校教育は
どこに向かうのか教育アドバイザー
工藤 勇一GIGAスクール構想が
支える学びの深化文部科学省
初等中等教育局 参事官
(デジタル学習基盤担当)
浅原 寛子教育DXのためのデータ活用
に向けた文部科学省の取組文部科学省
初等中等教育局参事官
(デジタル学習基盤担当)付
教育改革調整官
(命)教育DX推進室長
谷合 俊一先生は第二の相談相手!?
—AIに先に相談する世に、学校は何を提供できるのか青山学院大学・
青山学院中等多
非常勤講師
安藤 昇

公開授業

先進的な取り組みを行う
小学校の授業を会場でご覧いただけます

教育委員会・小中高教員対象

セミナーの一覧・お申し込みはこちら



ただいま、Webサイトで来場登録受付中です

最新情報など順次更新中!まずはWebサイトをご確認ください

<https://www.edix-expo.jp/osaka/ja-jp/visit.html>

EDIX大阪

検索



問合せ先

企画運営 RX Japan合同会社 主催者 EDIX実行委員会

〒104-0028 東京都中央区八重洲2-2-1 東京ミッドタウン八重洲 八重洲セントラルタワー11階

TEL:048-233-9478(10:00～18:00 土日祝除く) E-mail:edix.jp@rxglobal.com

Web: www.edix-expo.jp/osaka/ja-jp.html 個人情報保護方針:https://privacy.rxglobal.com/ja-ja.html

※掲載内容は予定であり、開催時には変更となる場合もございます。